鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(142)
小中原遺跡・市薗遺跡
二〇〇九年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（142）

国道270号改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

小中原遺跡
市薗遺跡

2009年3月
鹿児島県立埋蔵文化財センター

序　　文

この報告書は，国道270号改良事業に伴って，平成11年から平成12年度，平成16年度にかけて実施した小中原遺跡，市薗遺跡の発掘調査の記録です。

小中原遺跡，市薗遺跡は南さつま市（旧金峰町）に所在する遺跡で，古墳時代から古代にかけての資料を中心に，様々な時代の資料が得られました。特に，小中原遺跡からは掘立柱建物跡群や竪穴建物跡が須恵器や土師器の良好な資料を伴って出土し，万之瀬川下流域の古代に関する貴重な情報を得ることができました。

本報告書が，県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たりご協力いただいた県土木部，南さつま市（旧金峰町）教育委員会と発掘調査に従事されました地域の方々に厚くお礼申しあげます。

平成21年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　宮原　景信

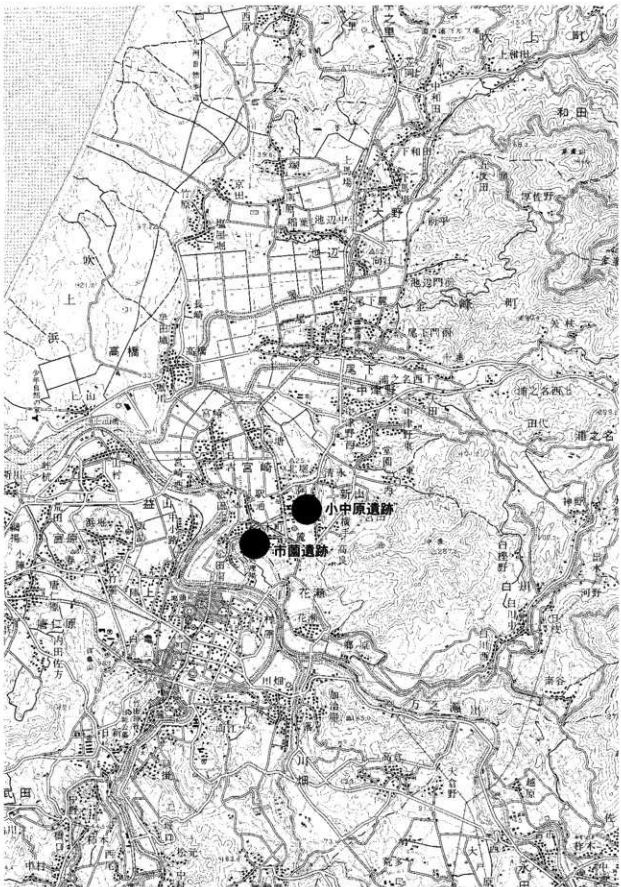
報告書抄録

ふりがな	こなかばるいせき，いちぞのいせき
書名	小中原遺跡，市薗遺跡
副書名	国道270号改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	142
編著者名	横手浩二郎，川口雅之
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899−4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　℡0995−48−5811
発行年月日	2009年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	東経 °′″	北緯 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
小中原遺跡	南さつま市 金峰町宮崎	462	35-41	130° 20′ 25″	31° 26′ 15″	1999.4.13 ～6.4 2000.4.10 ～5.12 2004.6.1 ～25	6,000	国道270号 改良事業
市薗遺跡	南さつま市 金峰町宮崎	462	35-75	130° 20′ 03″	31° 26′ 06″	1998.10.1 ～31	500	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小中原遺跡	集落	縄文晩期 古墳 古代	土坑 竪穴住居跡 溝状遺構，掘立柱建物跡，竪穴式建物跡，焼土，土坑	土器，石器 土器 土師器，須恵器	
市薗遺跡	集落	古代～中世	柱穴		

概要	小中原遺跡では，古代の遺構群がまとまって検出された。 市薗遺跡では，古代から中世の柱穴が検出された。



金峰町遺跡分布図（1:50000）

例　　言

1　本書は，国道270号改良事業に伴う小中原遺跡・市薗遺跡の発掘調査報告書である。

2　小中原遺跡・市薗遺跡は，鹿児島県南さつま市（旧金峰町）に所在する。

3　発掘調査及び報告書作成（整理作業）は，鹿児島県土木部道路建設課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

4　発掘調査は，小中原遺跡が平成11年４月13日から６月４日と平成12年４月10日から５月12日，平成16年６月１日から25日の３回，市薗遺跡は平成10年10月１日から31日に実施した。整理作業・報告書作成は平成20年度に実施した。

5　遺物番号は，通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。

6　挿図の縮尺は，各図面に示した。

7　本書で用いたレベル数値は，鹿児島県土木部が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。

8　発掘調査における図面の作成，写真の撮影は，調査担当者が行った。

9　遺構実測図のトレースは，整理作業員の協力を得て横手浩二郎，川口雅之が行った。

10　土器の実測・トレースは，整理作業員の協力を得て横手浩二郎，川口雅之が行った。

11　石器の実測・トレースは，整理作業員の協力を得て横手浩二郎が行った。

12　遺物の写真撮影は，横手浩二郎が行った。

13　本書の執筆・編集は，横手浩二郎，川口雅之が担当した。

14　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，遺物注記の略号は小中原遺跡が「H11KN」，「H12KN」及び「H16KN」，市薗遺跡が「IZ」である。

目　　次

序文
報告書抄録
例言
目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過
　第１節　調査にいたるまでの経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　調査の経過（日誌抄） …… 4

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 6
　第２節　歴史的環境 …… 6

第Ⅲ章　小中原遺跡の調査
　第１節１　平成11，12年度調査の概要 …… 9
　　２　平成11，12年度調査の層序 …… 9
　　３　平成11，12年度調査の成果 …… 16
　第２節１　平成16年度調査の概要 …… 58
　　２　平成16年度調査の層序 …… 58
　　３　平成16年度調査の成果 …… 58

第Ⅳ章　市廼遺跡の調査
　第１節　調査の概要 …… 66
　第２節　層序 …… 66
　第３節　調査の成果 …… 66

第Ⅴ章　出土遺物観察表 …… 68

第Ⅵ章　発掘調査のまとめ …… 70

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図 …… 7
小中原遺跡
第２図　調査範囲図（全体） …… 10
第３図　調査範囲図（平成11年度） …… 11
第４図　調査範囲図（平成12年度） …… 12
第５図　土層断面図（平成11年度） …… 13
第６図　土層断面図（平成12年度） …… 14
第７，８図　旧石器時代遺物出土状況図 …… 15
第９，10図　旧石器時代遺物実測図 …… 17
第11図　縄文時代遺構配置図 …… 20
第12～14図　縄文時代遺構実測図 …… 21
第15，16図　縄文時代遺物実測図 …… 23
第17図　古墳時代遺構実測図 …… 26
第18図　弥生，古墳時代遺物実測図 …… 27
第19図　古代遺構配置図 …… 30
第20～34図　古代遺構実測図 …… 31
第35～41図　古代遺物実測図 …… 48
第42図　中世遺構実測図 …… 56
第43図　近世遺構実測図 …… 57
第44図　中近世遺物実測図 …… 57
第45図　遺構実測図（平成16年度） …… 58
第46図　調査範囲図（平成16年度） …… 59
第47図　土層断面図（平成16年度） …… 59
第48図　遺物出土状況図（平成16年度） …… 61
第49～51図　縄文時代遺物実測図（平成16年度） 62
第52図　古墳～中世遺物実測図（平成16年度） … 65
第53図　古代掘立柱建物跡対照図 …… 65
市園遺跡
第54図　調査範囲図 …… 67
第55図　遺構検出状況図 …… 67

表　目　次

第１表　遺跡地名表 …… 8
第２表　小中原遺跡出土遺物観察表 …… 68

図　版　目　次

図版１　小中原遺跡掘立柱建物跡（平成11年度） 73
図版２　小中原遺跡方形竪穴遺構（平成11年度） 74
図版３　小中原遺跡焼土（平成11年度） …… 75
図版４　小中原遺跡掘立柱建物跡（平成12年度） 76
図版５　小中原遺跡土坑８（平成12年度） …… 77
図版６　小中原遺跡土坑ほか（平成12年度） …… 78
図版７　小中原遺跡集石ほか（平成16年度） …… 79
図版８　市園遺跡調査状況 …… 80
図版９～18　小中原遺跡出土遺物 …… 81

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用をはかるため，各開発機関との間で事業区内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，県土木部道路建設課（伊集院土木事務所：当時）は，「国道270号改良事業」の事業実施に先立って，対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度より文化財課となる。以下，文化財課）に照会した。

この計画地一帯には周知の埋蔵文化財包蔵地である小中原遺跡及び市薗遺跡が所在しており，小中原遺跡については，平成元～２年度に県道谷山加世田線の整備に伴って発掘調査と報告書作成が行われ，さらに平成３年度と５年度には，県道に隣接する私有地の造成に伴う発掘調査と報告書作成が金峰町教育委員会（当時）によって行われている。市薗遺跡についても，平成８年度に隣接する民間施設の建設に伴い金峰町教育委員会（当時）が発掘調査を実施している。

これらの結果を受けて，道路建設課，文化財課，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，埋蔵文化財センター）の三者は協議を行い，小中原遺跡については対象地域内の遺跡の範囲を把握するために試掘調査を実施することとし，調査は埋蔵文化財センターが担当することとした。市薗遺跡については金峰町教育委員会調査区に隣接することから，確認調査等は省略することとした。

試掘調査は，平成10年10月20，21日と27～29日の２回に分けて，予定地内11か所にトレンチを設定して実施した。その結果，６か所のトレンチで古墳時代～古代の遺物包含層が残存していることが確認された。

そこで，道路建設課，文化財課，埋蔵文化財センターは再度協議し，両遺跡とも事業区域内における現地保存や設計変更が不可能であることから，記録保存を目的として本調査を実施することになった。

両遺跡の調査期間は，市薗遺跡が500㎡を対象に平成10年10月１日から31日まで（実働12日間），小中原遺跡が5,300㎡を対象に平成11年４月13日から６月４日まで（実働28日間）と平成12年４月10日から５月12日まで（実働21日間）であった。

なお，小中原遺跡については，平成16年度にも，国道270号改良事業に伴って700㎡を対象に６月１日から25日まで（実働14日間），発掘調査を埋蔵文化財センターが担当して実施した。

報告書作成については，平成20年６月２日から平成21年３月31日まで（実働177日間），埋蔵文化財センターで実施した。

第２節　調査の組織

平成10年度

市薗遺跡（本調査）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（伊集院土木事務所）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永和人
調査企画担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	尾崎　進
		調査課長	戸崎勝洋
		調査課長補佐兼第一調査係長	新東晃一
		主任文化財主事	青崎和憲
発掘調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	倉元良文
		文化財主事	安藤　浩
		文化財研究員	中村和美
調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主査	政倉孝弘

		主　　査	前屋敷　裕　徳
		主　　事	溜　池　佳　子

小中原遺跡（試掘調査）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（伊集院土木事務所）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	吉　永　和　人
調査企画担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	尾　崎　　進
		調査課長	戸　崎　勝　洋
		調査課長補佐兼第一調査係長	
			新　東　晃　一
		主任文化財主事	青　崎　和　憲
発掘調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	倉　元　良　文
		文化財主事	安　藤　　浩
		文化財研究員	中　村　和　美
調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主　　査	政　倉　孝　弘
		主　　査	前屋敷　裕　徳
		主　　事	溜　池　佳　子

平成11年度

小中原遺跡（本調査）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（伊集院土木事務所）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	吉　永　和　人
調査企画担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	黒　木　友　幸
		調査課長	戸　崎　勝　洋
		調査課長補佐兼第一調査係長	
			新　東　晃　一
		主任文化財主事	中　村　耕　治
発掘調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	中　村　和　美
		文化財研究員	西　村　喜　一
調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長	有　村　　貢
		主　　事	溜　池　佳　子

平成12年度

小中原遺跡（本調査）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（伊集院土木事務所）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	井　上　明　文
調査企画担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	黒　木　友　幸
		調査課長	新　東　晃　一
		調査課長補佐	立　神　次　郎
		主任文化財主事兼第一調査係長	
			青　崎　和　憲
発掘調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	大久保　浩　二

	文化財主事	中村和美
	文化財主事	山崎省一
	文化財研究員	西村喜一
	文化財調査員	橋口亘
	文化財調査員	西吾意子
調査事務担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長	有村貢
	主事	溜池佳子

平成16年度
小中原遺跡（本調査）
事業主体　鹿児島県土木部道路建設課（伊集院土木事務所）
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者　鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	木原俊孝
調査企画担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	賞雅彰
	調査課長	新東晃一
	調査課長補佐	立神次郎
	主任文化財主事兼第一調査係長	池畑耕一
発掘調査担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事	中村耕治
	文化財主事	松下建生
調査事務担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長	平野浩二
	主事	福山恵一郎

平成20年度（報告書作成）
事業主体　鹿児島県土木部道路建設課（南薩地域振興局建設部）
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者　鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原景信
調査企画担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	平山章
	次長	池畑耕一
	調査第一課長	青崎和憲
	調査第一課第一調査係長	長野眞一
作成作業担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	横手浩二郎
	文化財研究員	川口雅之
作成事務担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長	紙屋伸一
	主査	五百路真

報告書作成指導委員会　平成20年12月９日　　調査課次長ほか２名

報告書作成検討委員会　平成20年12月11日　　所長ほか11名

第３節　調査の経過

発掘調査の経過は，日誌抄から略述する。

1　市蘭遺跡

日　付	掘り下げ作業等	実測調査等	写真撮影等
10／１～２	北側調査区環境整備，重機による表土はぎ 精査		
10／５～９	北側調査区精査 検出ピット掘り下げ	ピット実測	遺構検出状況
10／19～23，27	南側調査区重機による表土はぎ 精査，検出ピット，溝状遺構掘り下げ 終了	ピット，溝状遺構実測	遺構検出状況

2　小中原遺跡（平成11年度）

日　付	掘り下げ作業等	実測調査等	写真撮影等
４／13～16	環境整備，重機による表土はぎ 確認トレンチ掘り下げ		
４／19～28	重機による表土はぎ 精査 Ⅱ層	調査区設定	
５／６～14	Ⅱ層 柱穴埋土，焼土	遺物一括取上げ 掘立柱建物跡，焼土，溝状遺構平・断面図	掘立柱建物跡 焼土，溝状遺構
５／17～21	Ⅱ，Ⅶ層 柱穴埋土，焼土，溝状遺構	掘立柱建物跡，焼土平・断面図 調査区設定	
５／25～28	Ⅱ，Ⅶ層 各遺構埋土	調査区設定 掘立柱建物跡，焼土平・断面図	
５／31～６／４	Ⅶ層 竪穴建物埋土 終了，現場撤収	竪穴建物，掘立柱建物跡 平・断面図 Ⅱ層下部地形測量 土層断面図	竪穴建物

小中原遺跡（平成12年度）

日　付	掘り下げ作業等	実測調査等	写真撮影等
4／10～14	環境整備，重機による表土はぎ Ⅱ層，下層確認 柱穴，溝状遺構	調査区設定 掘立柱建物跡，溝状遺構平・断面図	遺跡全景 各遺構検出状況
4／17～21	Ⅱ，Ⅲ層，下層確認 竪穴建物跡，掘立柱建物跡埋土	Ⅱ層一括取上げ 各遺構平・断面図	各遺構完掘状況
4／24～28	Ⅲ，Ⅴ～Ⅶ層	掘立柱建物跡平・断面図 Ⅱ層下部地形測量	掘立柱建物跡完掘状況
5／1～12	Ⅵ，Ⅶ層 下層確認 土坑埋土 終了，撤収	遺物取り上げ 竪穴建物跡，土坑平・断面図 土層断面	土坑完掘状況

小中原遺跡（平成16年度）

日　付	掘り下げ作業等	実測調査等	写真撮影等
6／1～4	東側調査区環境整備，重機による表土はぎ		
6／7～11	東側調査区掘り下げ 西側調査区重機による表土はぎ	遺物取り上げ	遺跡全景
6／14～18	調査区掘り下げ	遺物取り上げ	遺構検出状況
6／21～25	終了	遺構実測 土層断面	

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

小中原遺跡と市薗遺跡が所在する南さつま市金峰町は，東部の起伏にとんだ金峰山系から中部に広がる阿多，田布施一帯のなだらかな低位の台地，西部のよく発達した吹上砂丘とその後背の沖積低地という，変化に満ちた地形が広がる地域である。地質は，金峰山系が四万十層群に属する堆積岩系からなる地質で形成され，平野部では万之瀬川水系によって運ばれた沖積層により形成されている。その中間に広がる低位の台地は，約24,000年前に噴火した姶良カルデラの火砕流堆積物（いわゆるシラス層）などで形成されている。

また，この一帯は二級河川万之瀬川水系に属している。万之瀬川は，鹿児島市錫山付近を源として南九州市川辺町などを経て南さつま市加世田万世で吹上砂丘を貫いて東シナ海へ注ぐ薩摩半島を代表する河川のひとつであり，金峰町内では，万之瀬川支流のひとつである長谷川が日置市吹上町十郎田付近を源として金峰山系を貫いて南流し，また同じ支流の堀川が西部の沖積平野を貫いて南流している。

両遺跡は，金峰山系のひとつ中岳の裾野として広がる標高25m前後の起伏の緩やかな台地上に立地する。台地東側は堀川の支流である岸元川で開析され，南から西側は万之瀬川によって開析される。小中原遺跡は台地のやや高まった西側一帯に所在し，市薗遺跡は台地の南側に所在する。

第２節　歴史的環境

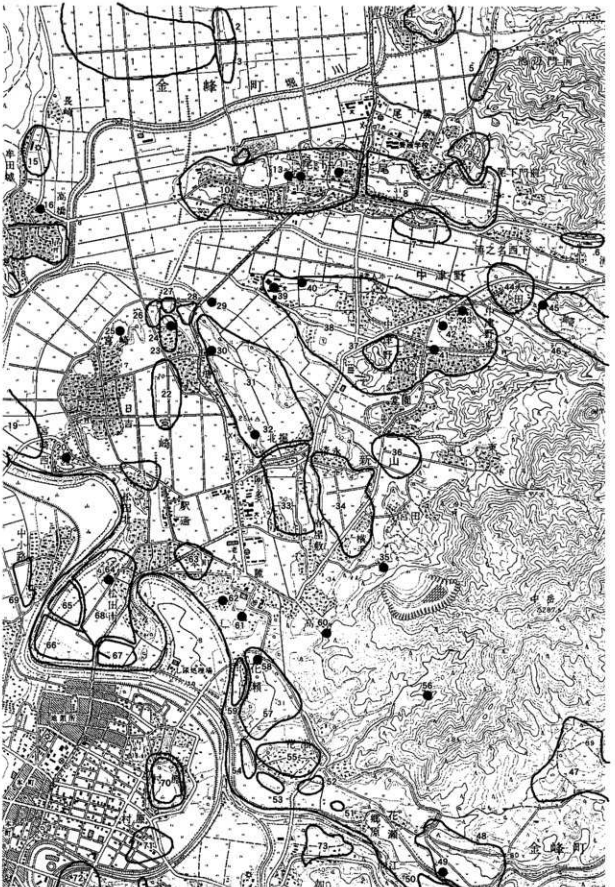
南さつま市金峰町には，今のところ130か所の埋蔵文化財包蔵地が所在しており，その中には，本県の考古学研究上欠かすことのできない遺跡が多数存在する。さらに，近年では万之瀬川に対する中小河川改修事業に伴う発掘調査により，持躰松遺跡や芝原遺跡など，縄文時代から近世にかけての大規模な複合遺跡が複数発見されているほか，農業開発総合センター遺跡群や山野原遺跡から旧石器時代の遺構・遺物も発見され，この地域での様相が明らかになりつつある。

先史時代では，旧石器時代については先述したとおりであるが，縄文時代では，隣接する旧加世田市に草創期から早期にかけての遺跡が知られている。また前期では，万之瀬川下流域の沖積低地を望む低位台地縁辺部に阿多貝塚や，堀川貝塚，さらには，縄文時代晩期から弥生時代前期にまたがる下原遺跡，弥生時代前期の高橋貝塚などの遺跡が点在する。また上記した中小河川改修事業により，万之瀬川の自然堤防上にも遺跡が形成されていることが判明した。一方低位台地上でも，弥生時代中～後期の下小路遺跡，松木薗遺跡や中津野遺跡などの遺跡が所在している。

歴史時代では，古代の小中原遺跡，山野原遺跡など掘立柱建物跡が多数出土する遺跡や，白樫野遺跡や中岳山麓窯跡群など，本県では類例の少ない遺跡が集中している。こうした考古学上の特徴に沿うかのように，日本書紀などの文献にも，この地域を記したと考えられる記述が散見される。

中世になると，この地を拠点として権勢をふるった人物として阿多郡司平忠景の名前が12世紀前半の史料に記されている。忠景逐電以降，本県域は島津義久による「三州統一」が果たされるまで，各地の小領主による分裂支配が長く続くが，金峰町一帯も一端没官領となったあと，鮫島氏や伊作氏，二階堂氏や島津氏などによる支配権争いの場となった。当該時期には，先述した持躰松遺跡や小園遺跡など，これまでに知られている県内の中世集落とは若干趣きを異にした遺跡が多く発見されている。なお，城館跡については，阿多城，貝殻崎城など複数の城館跡の存在が指摘されているが，発掘調査の例がないため，構造や残存状況等の詳細は明らかでない。

近世に入ると，金峰町一帯は島津氏の直轄領となり，阿多は145，田布施は221の門に分けられた。この間，石高増を目的として，新田川掘削工事や吹上浜砂防工事などが多大な労苦のうえに実施された。明治維新を経て，明治12年には阿多，田布施両村からなる阿多郡となり，30年には隣接する日置郡と合併して日置郡に含められた。その後，昭和31年に両村が合併して金峰町となり，平成19年に周辺の加世田市などと合併して南さつま市の一部となって現在に至っている。



第１図　周辺遺跡分布図（1:25000）

第１表　周辺遺跡地名表

番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	旧石	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	地形	備考
1	35-122	主水掘	金峰町池辺			●	●				台地	平成11年農政分布
2	35-103	稲葉下	金峰町池辺				●					平成10年農政分布
3	35-102	烏田	金峰町池辺				●					平成10年農政分布
4	35-24	牟礼ヶ城跡	金峰町池辺向江						●		丘陵	平成４年発掘調査
5	35-116	宮の前	金峰町池辺		●			●			低地	平成11年農政分布
6	35-115	樋掛田	金峰町浦之名				●	●	●		段丘	平成11年農政分布
7	35-14	筆付	金峰町尾下筆付		●	●		●			低地	平成12年発掘調査
8	35-53	田布施	金峰町野首他５		●		●		●		台地	平成２年分布調査
9	35-25	亀ヶ城跡	金峰町尾下麓						●		台地	
10	35-12	尾下	金峰町尾下			●					丘陵	
11	35-36	鳥迫薗	金峰町尾下鳥迫薗		●	●		●			台地	平成11年農政分布
12	35-7	山野原	金峰町尾下字山野原		●	●	●	●	●	●	台地	
13	35-13	松木薗	金峰町尾下松木薗			●					台地	昭和53年発掘調査
14	35-101	篠田	金峰町尾下					●			台地	平成10年農政分布
15	35-38	牟田城跡	金峰町高橋字真門砂入						●		低地	
16	35-11	下小路	金峰町高橋下小路			●					台地	昭和51年発掘調査
17	35-9	高橋貝塚	金峰町高橋			●					丘陵	昭和37年発掘調査
18	35-121	草原町	金峰町宮崎				●				段丘	平成11年農政分布
19	35-66	上川原	金峰町宮崎上川原			●	●				低地	平成８年発掘調査
20	35-29	古城跡	金峰町宮崎西						●		台地	
21	35-111	白糸原	金峰町宮崎		●	●	●		●			平成７～８年発掘調査
22	35-64	上花立	金峰町宮崎									
23	35-76	立石原	金峰町宮崎				●					平成７年農政分布
24	35-4	下堀	金峰町宮崎下堀		●	●	●				台地	
25	35-5	天神原	金峰町宮崎天神原		●	●	●				台地	
26	35-6	上焼田	金峰町宮崎上焼田	●	●	●	●	●	●		台地	昭和50・平成12年発掘調査
27	35-45	堀川貝塚	金峰町宮崎		●						台地	
28	35-1	阿多貝塚	金峰町宮崎上焼田		●	●	●				台地	昭和53年発掘調査
29	35-28	貝殻崎城跡	金峰町塘						●		台地	
30	35-10	塘	金峰町宮崎塘			●					台地	
31	35-74	野村原	金峰町中津野				●					平成７年農政分布
32	35-16	新山北の堀	金峰町新山2113			●		●			台地	
33	35-41	小中原	金峰町新山小中原	●	●	●	●	●	●		台地	平成元・２年発掘調査
34	35-112	立野原	金峰町新山				●					平成11年農政分布
35	35-17	新山南	金峰町新山南			●					台地	
36	35-113	三反田	金峰町新山			●	●					平成11年農政分布
37	35-30	中津野城跡	金峰町新山						●		台地	
38	35-15	中津野	金峰町中津野1119			●					台地	昭和25年発掘調査
39	35-22	中津野下原	金峰町中津野下原		●	●					台地	昭和53年発掘調査
40	35-43	平畑	金峰町中津野		●	●	●		●		台地	平成10年発掘調査
41	35-20	加治屋坂	金峰町加治屋坂			●					台地	
42	35-37	上山野	金峰町中津野上山野		●			●			台地	平成11年発掘調査
43	35-44	江田城跡	金峰町中津野						●		台地	
44	35-114	貝曲り	金峰町浦之名				●	●			段丘	平成11年農政分布
45	35-18	上床原	金峰町浦之名西下			●					台地	
46	35-27	上床城跡	金峰町浦之名						●		台地	
47	35-57	宇治野原	金峰町白川西	●	●		●				台地	平成３年発掘調査
48	35-46	中岳山麓古窯跡群	金峰町花瀬					●			山麓	
49	35-49	郷ノ原	金峰町花瀬				●				台地	上加世田遺跡
50	35-95	鮎受	金峰町花瀬				●				河岸段丘	平成10年農政分布
51	35-96	弥ナ山	金峰町花瀬		●						河岸段丘	平成10年農政分布
52	35-97	上水流Ｂ	金峰町花瀬	●	●			●		●	河岸段丘	平成10年農政分布
53	35-98	上水流	金峰町花瀬		●	●	●	●	●	●	低地	平成７年発掘調査
54	35-99	森山	金峰町花瀬		●	●	●	●	●		低地	平成12年発掘調査
55	35-48	花瀬	金峰町花瀬				●			●	台地	上加世田遺跡
56	35-23	荒平古窯跡	金峰町花瀬荒平					●			山腹	
57	35-47	花瀬今城原	金峰町花瀬今城原		●	●	●				台地	上加世田遺跡
58	35-32	今城跡	金峰町花瀬今城			●			●		台地	
59	35-100	大迫田	金峰町花瀬						●		低地	平成10年農政分布
60	35-35	大年寺跡	金峰町花瀬						●		丘陵	
61	35-33	鶴之城跡	金峰町花瀬鶴之城						●		台地	
62	35-26	阿多城跡	金峰町阿多						●		低地	
63	35-75	市薗	金峰町宮崎		●				●		台地	
64	35-34	上宮寺跡	金峰町松田南						●		台地	
65	35-130	持躰松	金峰町松田南		●	●	●	●	●		低地	平成６年発掘調査
66	35-80	渡畑	金峰町松田南		●		●	●	●		低地	
67	35-81	芝原	金峰町松田南		●		●	●	●		低地	
68	35-50	松田南	金峰町花瀬		●		●		●		台地	上加世田遺跡
69	4-16	中小路	南さつま市加世田益山			●	●		●	●	低地	平成元年発掘調査
70	4-13	栫ノ原	南さつま市加世田村原	●	●	●	●		●	●	台地	国指定史跡
71	4-49	永田	南さつま市加世田川畑				●				低地	
72	4-11	上加世田	南さつま市加世田川畑		●	●	●	●	●		河岸段丘	昭和43年発掘調査
73	4-12	加治屋	南さつま市加世田川畑		●	●	●	●			丘陵	昭和53年発掘調査

第Ⅲ章　小中原遺跡

本報告では，前述したように平成11年度から16年度にかけて調査された３か所をまとめている。しかし，平成11，12年度の調査と平成16年度の調査では地点が離れ，発見された主な時代も異なることから，本報告では，平成11，12年度の調査と平成16年度の調査を節を分けて紹介することとしたい。

第１節１　平成11，12年度調査の概要

平成11年度の調査は，工事用センター杭を基準線として，1辺10mの区画を設定して実施した。

なお，試掘調査の結果から，Ａ～Ｃ－８～11区，Ｃ～Ｄ－14～18区が削平されていることが判明したため，これらの部分を調査対象面積から除外した上で，Ａ～Ｃ－12～16区を「Ａ地区」，Ａ・Ｂ－１～７区を「Ｂ地区」と便宜的に設定し，調査を実施することとした。

調査は，重機を用いて表土を除去したのち，Ⅱ層以下を人力により掘り下げた。その後，遺構検出作業を行い，検出した遺構については，埋土の除去，遺物取り上げ，写真撮影，図化作業を実施した。遺構に伴わない包含層中の遺物は出土区と包含層を記録した後一括して取り上げた。

その結果，「Ａ地区」では古代の溝状遺構が１条発見された。造園農地として利用されていたため，包含層は調査区内でほぼすべて攪乱されていた。

一方「Ｂ地区」では，古代の掘立柱建物跡７棟，竪穴住居跡１基など古代の遺構がまとまって発見されたほか，古墳時代の竪穴住居跡も１基発見された。遺物も，包含層中から土師器や須恵器が比較的良好な状態で発見された。

Ⅲ層上面の縄文晩期相当層以下は，試掘調査の結果に基づき任意に下層確認トレンチを設定し掘り下げを実施，遺物が確認できた時点で状況を判断し，適宜調査範囲を拡大して必要な作業を行うこととした。その結果，「Ａ地区」のⅦ～Ⅷ層にかけて黒曜石の剥片等がある程度まとまって出土した。

平成12年度の調査は，平成11年度の調査と同様，工事用センター杭を基準線として１辺10mの区画を設定して実施した。

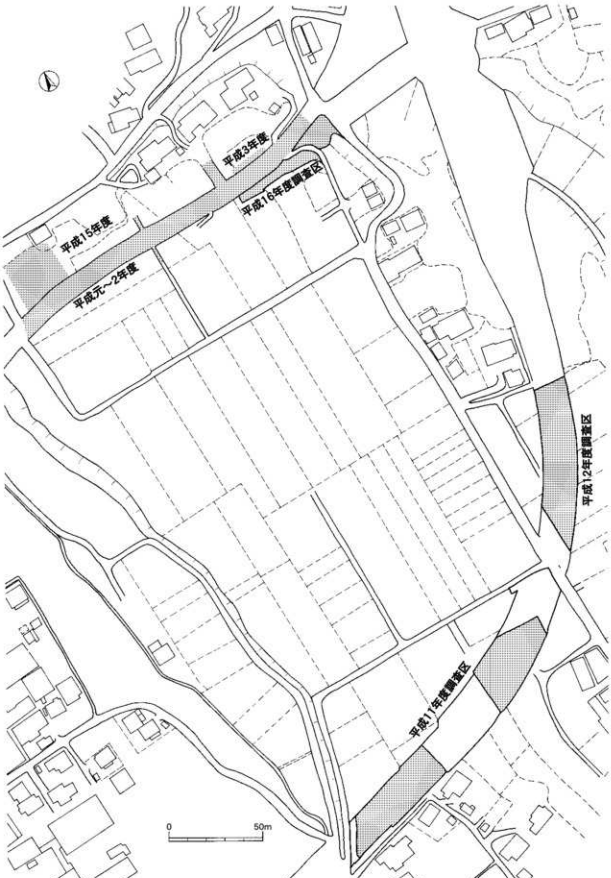
調査は，平成11年度と同様の手順で，Ⅱ～Ⅲ層を人力により掘り下げて，遺構調査，遺物取り上げを行った。その後，試掘調査の結果に基づき，Ｊ～Ｋ－21～25区にかけてのみⅢ層以下を調査した。まずⅢ～Ⅴ層までを重機を用いて除去し，Ⅵ層以下を人力で掘り下げた。

その結果，古代の掘立柱建物跡２棟，溝状遺構５条などが発見されたほか，縄文時代早期，晩期の土坑や近世の溝状遺構などが発見された。遺物も土師器や須恵器，縄文土器などが出土したが，平成11年度調査区よりは少なかった。また，Ⅵ層以下の調査で頁岩製の剥片石器などが若干発見された。

第１節２　平成11，12年度調査の層序（第５，６図）

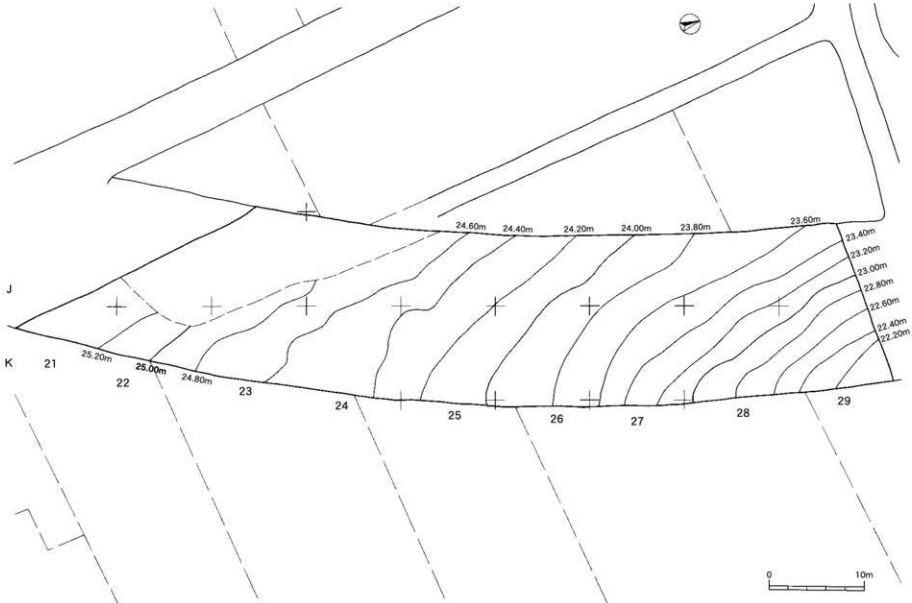
平成11，12年度調査区の土層は，平野に隣接した低位の台地上にあるため，下記の柱状図の用におおむね安定した堆積状況を示している。しかし火山灰の堆積は総じて薄く，また各層は漸移的に変化していて，層の弁別に若干注意を要する場合があった。

Ⅰ層（暗灰褐色土）	表土・耕作土
Ⅱ層（黒色土）	弥生～古代の包含層
Ⅲ層（橙色火山灰土）	上部は縄文時代晩期の包含層（アカホヤ火山灰土層）
Ⅳ層（茶褐色土）	
Ⅴ層（黒褐色砂質土）	サツマ火山灰（Ｐ14）を含む
Ⅵ層（茶褐色粘質土）	
Ⅶ層（暗茶褐色粘質土）	旧石器時代の包含層
Ⅷ層（濁黄白色砂質土）	上部は明黄色の軽石が混じる（ＡＴ火山灰層）

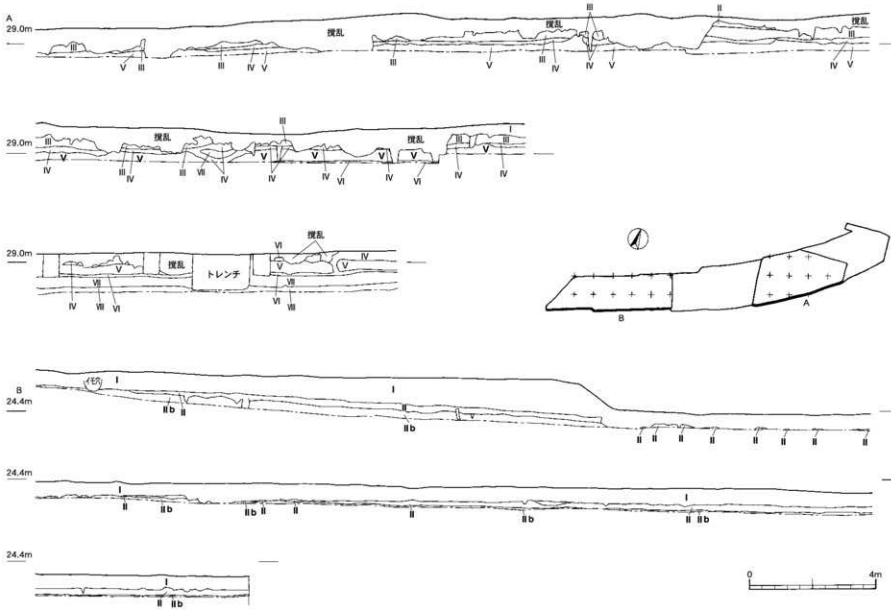


第２図　調査範囲図（全体）

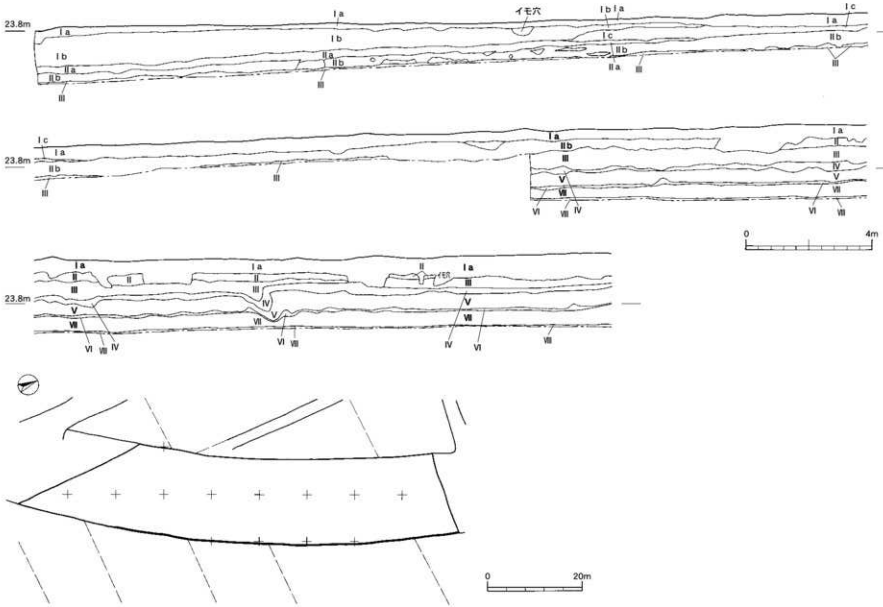
第３図　調査範囲図（平成11年度）



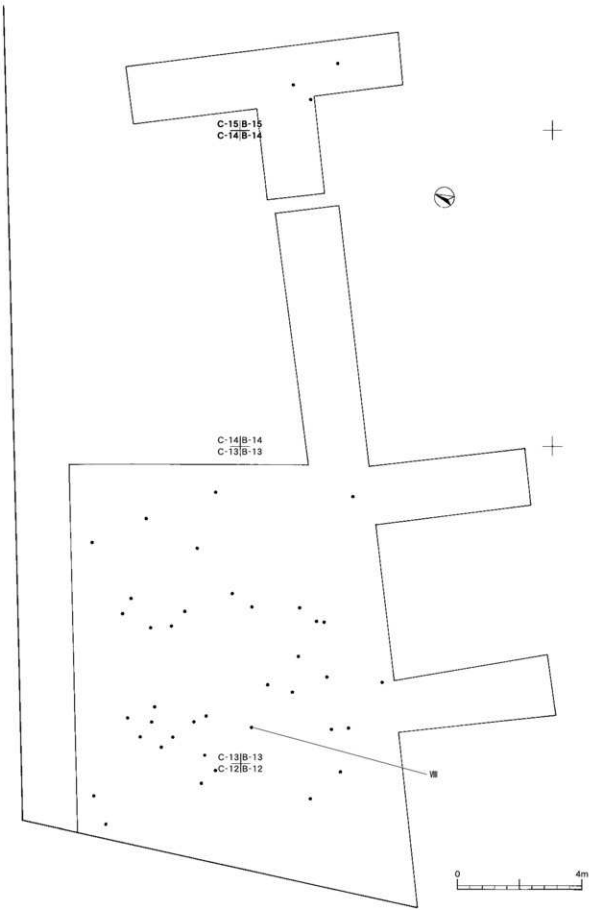
第４図　調査範囲図（平成12年度）



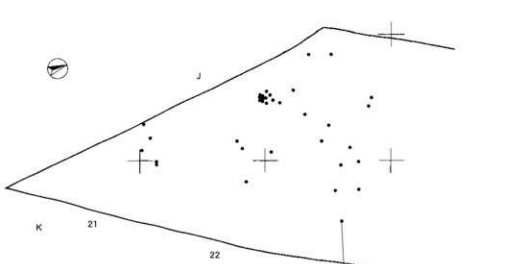
第５図　土層断面図（平成11年度）



第６図　土層断面図（平成12年度）



第７図　旧石器時代遺物出土状況図（引出線をつけたもの以外はⅧ層出土）



第８図　旧石器時代遺物出土状況図（引出線をつけたもの以外はⅦ層出土）

第１節３　平成11，12年度調査の成果

旧石器時代（第７～10図）

平成11年度のＢ・Ｃ－12～15区及び平成12年度のＪ・Ｋ－21～23区のⅥ～Ⅷ層にかけて，黒曜石と頁岩のフレイク，チップ類が出土した。遺物が集中して出土したのは，Ⅶ層である。

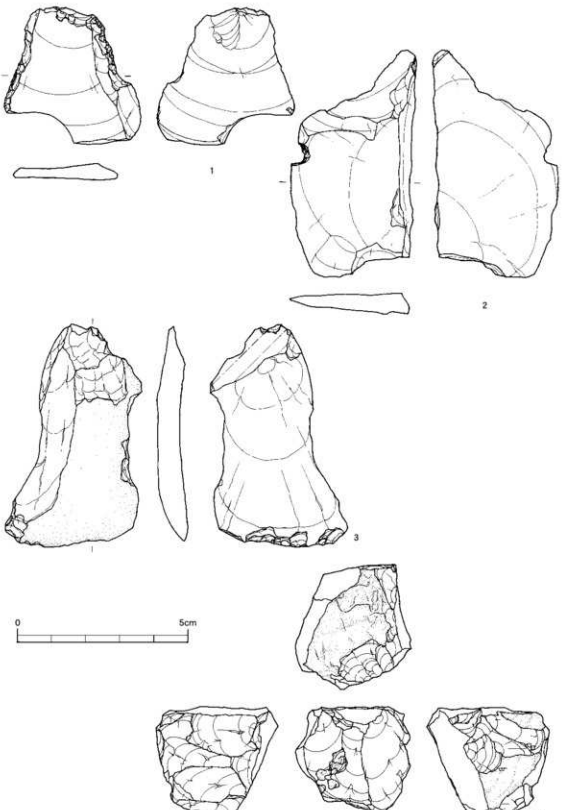
しかし，平成12年度の調査区で若干集中する部分がみられたものの，いずれの調査区でも明瞭なブロックを形成していると判断できがたい出土状況であったほか，フレイク類も接合する資料はない状況である。遺物も定型石器の出土は石核を除いてみられず，剥片を一時的に利用したような石器が出土している。

遺物（第９，10図１～８）

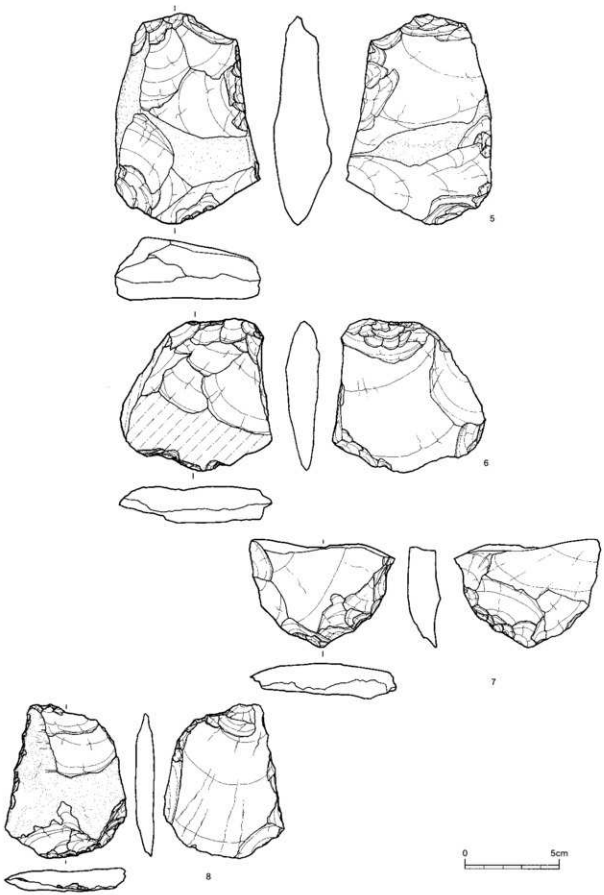
１は，頁岩製の剥片石器である。Ｋ－23区Ⅶ層から出土した。薄く幅広の縦長剥片の両側辺に腹面側から刃部加工を施している。２は，頁岩製の横長剥片の端部にノッチ加工を施している。Ｊ－24区Ⅶ層から出土した。上部の尖頭状の部分には，加工は施されていない。３は，自然面を残す頁岩の縦長剥片の端部に加工痕が認められた剥片である。Ｊ－25区Ⅶ層から出土した。４は黒曜石製の石核である。Ｃ－12区Ⅶ層から出土した。２か所に自然面を残すが，そのうち１面は打面として利用している。剥片の剥ぎ取り作業は２面で行われている。黒曜石の産地は北薩方面と思われる。

５～８は大形の剥片石器である。いずれも頁岩製であるが，表面の劣化が著しく，使用状況の詳細は明らかにできなかった。

５は板状の転礫の上下と右側辺に加工痕が認められた資料である。Ｊ－25区Ⅶ層から出土した。剥片を剥ぎ取っているようにも観察できるが，接合資料は確認できなかった。６は自然面を残す剥片の下縁部に加工痕が認められた資料である。Ｊ－22区Ⅶ層から出土した。上部にも調整剥離を行っている様子が確認できるが，打瘤を除く目的でもあったのであろうか。７は横長剥片の側辺部右側に刃部加工のような加工が施された資料である。Ｊ－24区Ⅶ層から出土した。剥片は破断しているが，使用による破断か，破断された後に加工を施し利用したのか不明である。８は自然面を残す縦長剥片の周囲に加工痕が認められた資料である。Ｊ－25区Ⅶ層から出土した。ここで紹介した頁岩製剥片資料のなかでは，薄い素材を用いている。



第９図　旧石器時代遺物実測図(1)



第10図　旧石器時代遺物実測図(2)

縄文時代（第11～16図）

平成12年度のC－15～K－27区のⅢ層及びⅤ層から，若干の遺構と遺物が出土した。

遺構（第11～14図）

縄文時代草創期相当の土坑が，平成12年度のJ・K－24区から土坑1が1基，縄文晩期相当の土坑が同じく平成12年度のJ・K－25区から2～5が4基，それぞれ発見されている。2～4については，一定の間隔をおいて列状に並んで発見されているが，各土坑の長軸方向の向きは，列状に並ぶ方向と明確な整合性は見出しにくい。また，地形と比較した場合，1号土坑は長軸を傾斜に直交させるように構築されており，2，3は長軸を傾斜と並行に構築させているという状況である。以下，順に形状等を概説する。

土坑1（第12図）

Ⅶ層上面で発見された。埋土にはⅤ層が入っていた。長径169cm，短径73cm，検出面からの深さ約44cm，長楕円形の平面プランを有し，特に底面は幅が30cm程度と細長い形状であった。掘り込み面には，顕著ではないものの，角度の変換点が確認でき，わずかながらもろうと状の断面形状をしていることがわかる。底面に土坑に伴うと想定できるような施設等は確認できなかった。

土坑2（第13図）

Ⅴ層上面で発見された。埋土にはⅢ層が入っていた。長径118cm，短径67cm，検出面からの深さ約25cm，楕円形の平面プランを有する。断面形状はほぼ逆台形で，底面に土坑に伴うと想定できるような施設等は確認できなかった。

土坑3（第13図）

Ⅴ層上面で発見された。埋土には2と同じくⅢ層が入っていた。長径150cm，短径77cm，検出面からの深さ約60cm，ほぼ楕円形の平面プランを有する。断面形状はほぼ方形で，底面に土坑に伴うと想定できるような施設等は確認できなかった。

土坑4（第14図）

Ⅴ層上面で検出された。埋土には2，3と同じくⅢ層が入っていた。一部，確認調査時に削られている。残存部の長径97cm，トレンチ断面で計測した短径80cm，トレンチ断面で計測した検出面からの深さ約37cm，楕円形の平面プランを有していたと思われる。断面形状はほぼ逆台形である。底面に土坑に伴うと想定できるような施設等は確認できなかった。

土坑5（第14図）

Ⅴ層上面で検出された。埋土には，Ⅲ層のほかⅤ層も混在していた。長径約70cm，短径約45cm，検出面からの深さ約25cm，平面プランは不整形である。断面形状は略台形で，底面にわずかに段を有する。

遺物（第15図，16図）

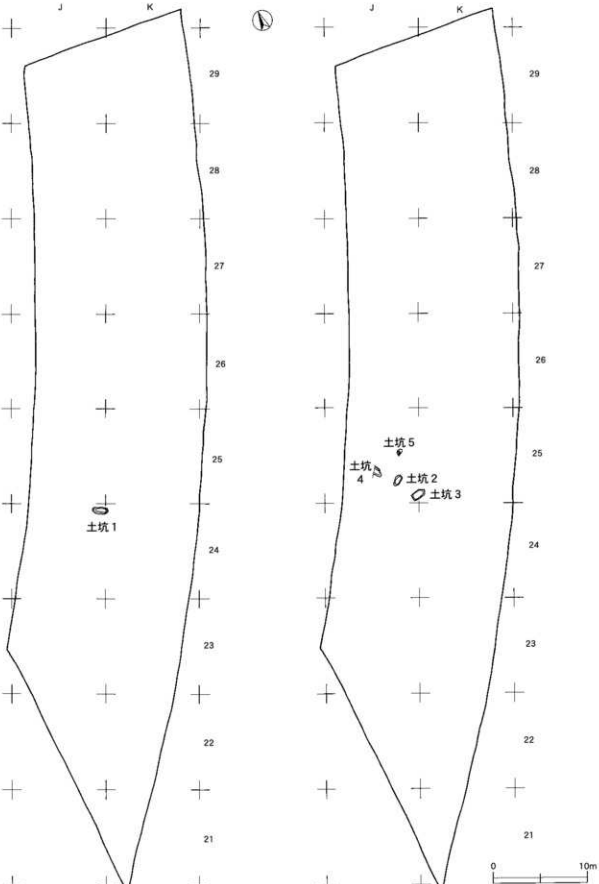
平成11年度調査のA・B・C－3～15区及び平成12年度調査のJ・K－21～23区から土器と石器が出土した。

土器（第15図9～15）

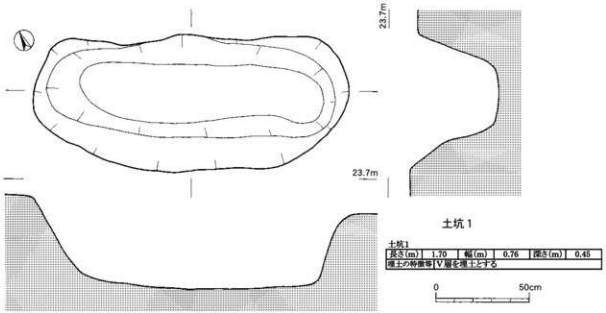
9，10は，前期の曽畑式土器と思われる。C－15区から出土した。曽畑式土器特有の幾何学文が施文されており，沈線は細く鋭利な工具で施文されている。器壁は比較的薄く，滑石は混入していない。

11は，後期の指宿式土器系統の資料と思われる。K－24区から出土した。口縁部は外反する。わずかに器面調整は比較的丁寧なナデ調整が施されている。文様は，棒状の施文具により粗雑な鋸歯状の文様が描かれているほか，口唇部上面にも連続刺突文が施文されている。そのため，口唇部形状は小波状を呈している。

14は，型式，時期ともに詳細のわからない資料である。便宜上ここで紹介するが，異なる時代の遺物である可能性も十分ある。胎土は精製されており，土師質のような印象も受ける。器面調整は，外面は丁寧なナデ調整であるが，内面は粗くナデられている。文様は爪状の微細な施文具により，一方向から連続して軽く突き刺すようにして施文されている。器形は不明である。



第11図　縄文時代遺構配置図（左：草創期，右：晩期）



第12図　縄文時代遺構実測図

12及び15は，晩期の浅鉢の口縁部及び胴部屈曲部である。どちらも内面外面ともに丁寧に研磨されているが，工具の痕跡は明瞭ではない。口唇部内面及び胴部屈曲部の内面は鋭角にしあげられており，同一型式の資料と考えられる。13は晩期深鉢の底部と思われる。内外面ともに剥離が顕著であり，詳細な観察はできなかった。高台状の整形を施している。脚部は略方形に仕上げられ，ほぼ直に立ち上がる。

石器（第16図16～23）

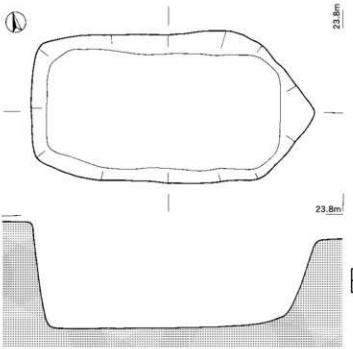
16，17は，確認調査時に出土した石鏃で，いずれも黒曜石製である。16は素材剥片の背部のみに整形剥離刃部形成加工が施された状態で，腹部側からの加工がなく打瘤などが残っていることから未製品と考えられる。17は完成品と思われるが，先端及び脚部の欠損が認められる。

18，19は，磨・敲石類である。それぞれA－2～K－21区から出土した。18は硬砂岩製で，表裏面の2か所のほか，周縁部で敲具として使用された痕跡を認めることができる。表側に顕著な光沢を持つ部分があることから，この面は主に磨面として使用されていたと思われる。19は砂岩製で敲石としての利用は確認できない。全体的に鈍い光沢があり，特定の面を観察することはできなかった。18と比較してやや軽い。

20～22は，敲石類である。それぞれK－21～A－13区などから出土した。

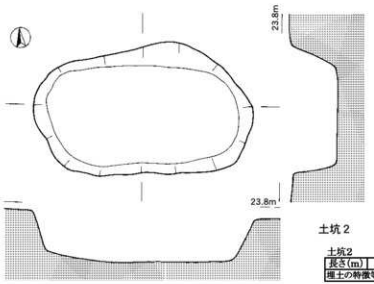
20，21は黒色頁岩製で，棒状の転礫を用いて，両端部のみ使用している。使用面はごく狭い範囲に集中しており，限られた作業工程で使用されたものか使用頻度が少なかったものか，にわかに判断できない。22はホルンフェルス製で，転礫から剥離した厚みのある剥片の端部を敲具として利用している。両側辺には調整剥離が確認できるほか，頂部にも成形剥離を施しているのが観察できる。

23は確認調査時に出土した礫石器で，頁岩製である。板状の横長剥片の端部を用い，両側辺に調整剥離を施している。打斧として利用されたのであろうか。



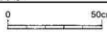
土坑 3

土坑3							
長さ(m)	1.51	幅(m)	0.80	深さ(m)	0.52		
埋土の特徴等	皿層を埋土とする						

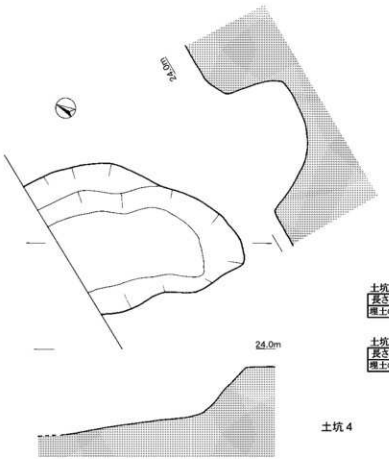


土坑 2

土坑2							
長さ(m)	1.16	幅(m)	0.77	深さ(m)	0.25		
埋土の特徴等	皿層を埋土とする						



第13図　縄文時代遺構実測図



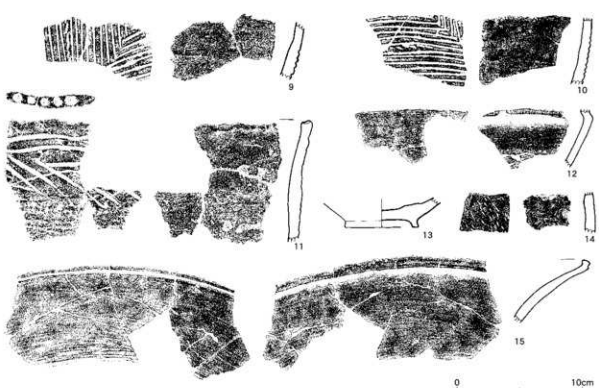
土坑4

長さ(m)	0.97	幅(m)	0.79	深さ(m)	0.35
埋土の特徴等	Ⅲ層を埋土とする				

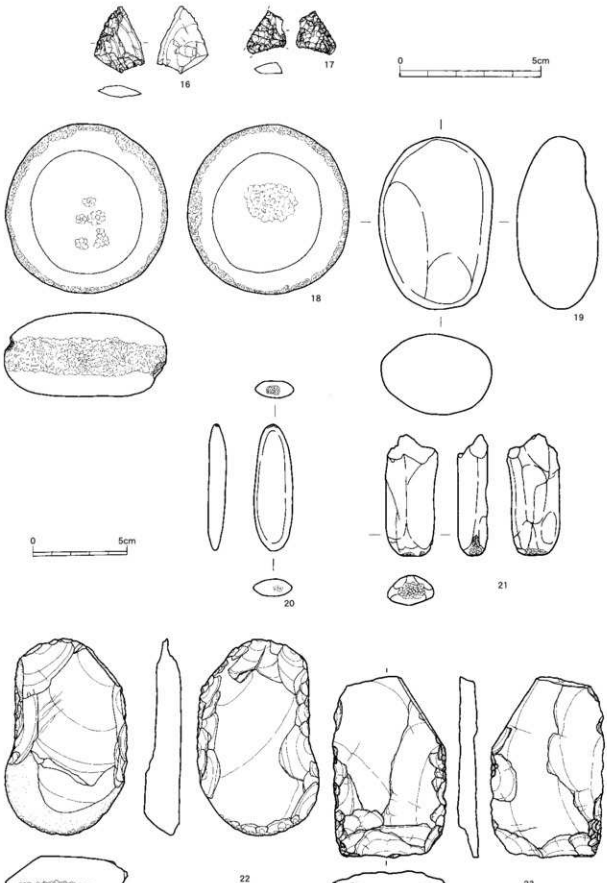
土坑5

長さ(m)	0.65	幅(m)	0.43	深さ(m)	0.25
埋土の特徴等	Ⅲ層とⅤ層の埋土の混在				

第14図　縄文時代遺構実測図



第15図　縄文時代遺物実測図(1)



第16図　縄文時代遺物実測図(2)

弥生～古墳時代（第17，18図）

平成11年度，12年度とも調査範囲の全面で調査を実施した。その結果，遺構は古墳時代の竪穴状遺構が１基発見されたものの，遺物の出土は少なかった。

遺構（第17図）

古墳時代の竪穴状遺構が１基，平成11年度のＢ－３区から発見された。

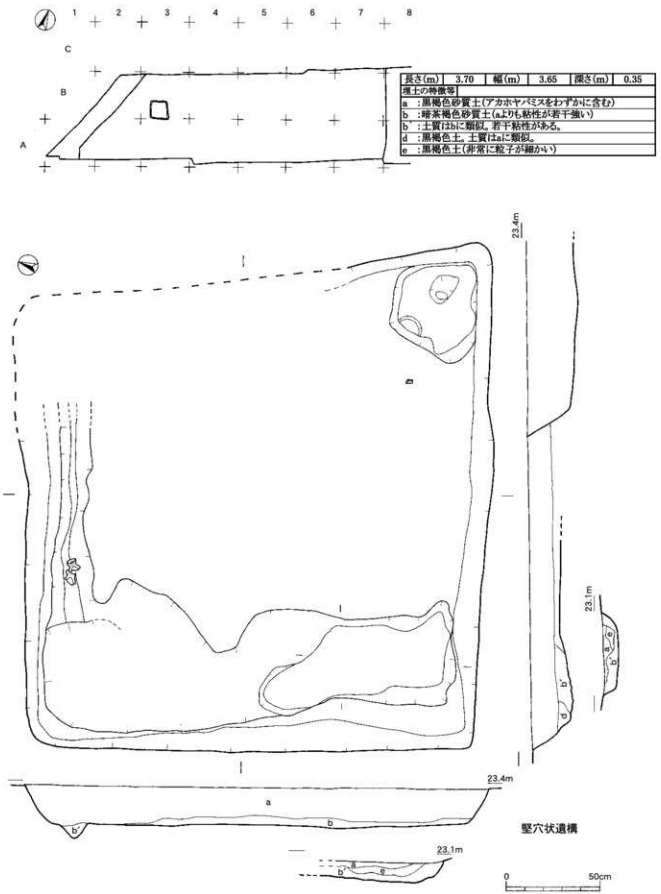
北東側を一部古代の方形竪穴遺構に切られているが，約3.4m×4.0mの方形プランで，検出面からの深さは約34cmである。遺構内及び掘込み面周辺には，遺構に伴うと想定できるような柱穴は発見できなかった。しかし，床面の西辺及び北辺には浅い溝状の掘込みが，また，床面南東隅にも土坑状の掘込みが発見された。これらは何らかの施設の可能性もあるが，住居構築時の底面である可能性もあり，調査時に用途等を確定できなかった。

埋土は，２層に分層できた。ほとんどはアカホヤパミスを含み非常に細かく粘性の低い黒褐色砂質土で，床面直上には，土質は類似するがアカホヤパミスをほとんど含まない埋土が堆積していた。掘込み内には，同じく土質が類似しながらもアカホヤパミスの混じり具合の違いにより分層できる土が堆積していた。掘込み内と住居内埋土では，感覚的ではあるが硬さに著しい差異は感じられなかった。

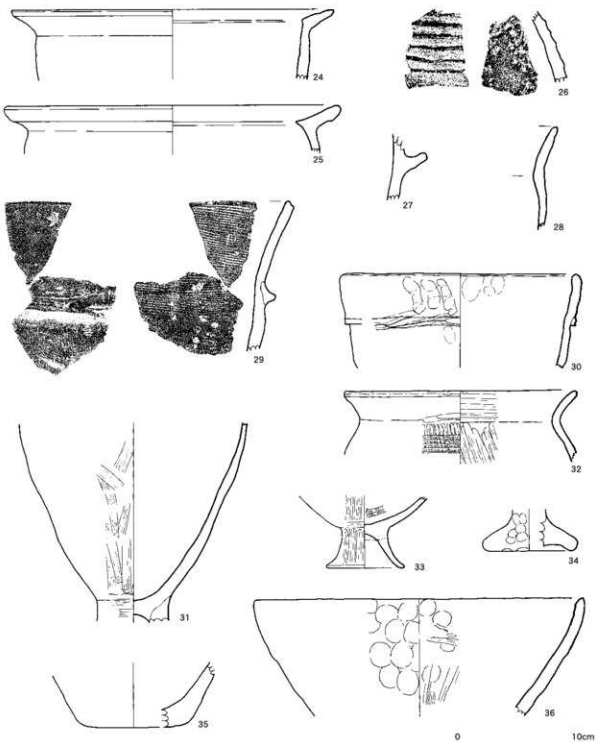
遺物（第18図24～36）

24～27は，弥生時代終末期の資料と考えられる。24，25は甕口縁部であるが，形状は大きく異なり，24が直線的に立ち上がる胴部から口縁部がく字状に折れて先端部を尖らせているのに対し，25は丸く張る胴部から口縁部内面をわずかに突出させ，口縁部先端は丸くおさめている。前者は大隅半島系，後者は西九州系の甕と考えられる。26は多条突帯をもつ壺の肩部と思われる。突帯の整形が粗く，断面も鈍い三角形であることから，この時期の在地壺に散見される資料と判断した。27は，断面長方形の突帯が斜め上方に貼り付けられる特徴から，鍔状突帯付甕の破片と考えられる。器面調整は比較的丁寧である。

28～36は，古墳時代の資料と考えられる。28，29は口縁部が外反する器形から，東原式土器から笹貫式土器並行の資料と考えられる。30は，口縁部が直行し端部でわずかに内湾していることから，笹貫式土器の範疇に含まれると考えられる。器面調整はナデであるが，指頭による成形痕を残す。突帯の成形も指頭で行ったと思われ，仕上げも粗い仕上げとなっている。31は胴部資料である。底部から直線的にたちあがり，あまり胴張りしない器形である。器面はハケ目調整が施される。32は，やや小振りな甕の口縁部であるが，小礫が多く含まれた器壁は内面のケズリ調整のため薄く仕上げられる。外面はタタキ様のハケメ調整が観察される。こうした特徴から考慮すると，この資料は在地土器の系譜では考えにくい。33，34は小形の高坏と思われる。33は，丁寧な器面調整が施され，器壁も薄く仕上げられている。脚はハの字状に湾曲しながら開く。34は，手づくねで仕上げられている。35は，壺の底部と思われる。36は，大きく開く器形から，鉢型土器と思われる。基本的に指頭により成形・整形が行われているが，内面下部のみハケ目調整が施される。スス等の付着は確認できない。



第17図　古墳時代遺構実測図



第18図　弥生，古墳時代遺物実測図

古代（第19～41図）

平成11年度，12年度とも調査範囲の全面で調査を実施した。本遺跡で，遺構・遺物が最も多く発見された時代である。

遺構（第19～34図）

掘立柱建物跡，方形竪穴遺構，溝状遺構，土坑が発見された。それぞれの遺構は，ある程度まとまった範囲に残っている傾向があり，特に11年度調査区から発見された掘立柱建物跡は密集している。方形竪穴遺構は，平成11年度調査区で掘立柱建物跡群の集中区域から10mほど離れた地点で発見された。溝状遺構は，さまざまな規模のものが発見されたが，調査範囲の問題や残存状況の限界もあって，配置状況や相互の関係性の詳細は不明である。土坑は，平成12年度調査区で発見された。規模はいずれも同等であるが，1基のみ方形のプランである。

以下，遺構ごとに状況を略述していきたい。

掘立柱建物跡（第20～27図）

平成11年度調査区から7棟，平成12年度調査区から2棟発見された。径や深さが大きく柱痕跡も確認できた柱穴が比較的整然と配置された建物と，それらよりも規模の小さく形状も不揃いな柱穴で構成される建物とに大別される。

以下，平成11年度調査区発見の建物から概説する。

掘立柱建物跡1（第20図）

A・B－5区で発見された。北辺のみ柱穴の間隔がやや長いが，2間×3間の長方形プランの建物跡と考えられ，長軸が南北方向に合致している。柱芯間で計測した場合の面積は約21.0㎡，各柱穴間の幅は平均で130㎝，全柱穴の径と深さは平均でそれぞれ45㎝，48㎝である。柱痕跡が確認できた柱穴が多いが，各柱穴の状況から建替えなど，建物の修復が行われたことが想定できる。また，複数の柱穴埋土上位から遺物が出土しているが，いずれもごく小片であり，建物との関係の詳細は不明であった。

掘立柱建物跡2（第21図）

A・B－5・6区で発見された。2間×3間の長方形プランの建物跡と考えられ，長軸が南北方向に合致している。柱痕跡を利用して計測した場合の面積は約18.8㎡，各柱穴間の幅は平均で132㎝，全柱穴の径と深さは平均でそれぞれ45㎝，45㎝である。柱穴の深さや形状は，西辺の一部を除いていずれもほぼ似かよっており，かつほぼすべての柱穴で柱痕跡が確認できた。柱穴埋土からの遺物の出土は記録されていない。

掘立柱建物跡3（第22図）

A・B－6区で発見された。2間×3間の長方形プランの建物跡と考えられ，長軸は南北方向からやや北北西に傾いて建てられている。柱芯間で計測した場合の面積は約25.4㎡，各柱穴間の幅は平均で167㎝，全柱穴の径と深さは平均でそれぞれ40㎝，31㎝である。この建物跡は，柱穴間の間隔が他の掘立柱建物跡と比較して長いこと，柱穴の深さにばらつきがみられることが特徴である。柱穴埋土からの遺物の出土は記録されていない。

掘立柱建物跡4（第23図）

A・B－6区で発見された。東辺のみ柱穴が1個多いが，プランとしては1間×1間の長方形の建物跡のように見え，長軸は南北方向からやや北北西に傾いて建てられている。柱芯間で計測した場合の面積は約4～6㎡，全柱穴間の幅は平均で169㎝，全柱穴の径と深さは平均でそれぞれ37㎝，31㎝である。南東隅の柱穴がやや浅いものの，四隅にある柱穴の形状はほぼ類似しており，柱穴の配置や柱穴間の長さなどの平面プランから受ける奇異な印象に対して，実際には安定した建物であった可能性を感じさせる。柱穴埋土からの遺物の出土は記録されていない。

掘立柱建物跡5（第23図）

B－6区で発見された。北辺のみ柱穴が1個多いが，プランとしては1間×1間の略方形の建物跡のように見え，南北方向からやや北北西に傾いて建てられている。柱芯間で計測した場合の

面積は約6.2㎡，全柱穴間の幅は平均で128cm，全柱穴の径と深さは平均でそれぞれ30cm，19cmである。柱穴の深さや形状はいずれもほぼ似かよっており，埋土にはⅡ層とⅢ層が混ざっているものがほとんどであった。南西隅の柱穴埋土上位から遺物が出土しているが，ごく小片で建物との関係の詳細は不明であった。

掘立柱建物跡６（第24図）

Ｂ－５・６区で発見された。２間×２間の略方形の建物跡と想定した。南北方向からやや北北西に傾いて建てられている。想定に用いた柱穴から面積を試算すると約12.5㎡，柱穴間の幅は平均で203cm，計測できた柱穴の径と深さは平均でそれぞれ35cm，30cmである。柱穴の深さや形状にばらつきがあるが，柱穴間の長さは比較的揃っている。

掘立柱建物跡７（第25図）

Ａ・Ｂ－６区で発見された。２間×２間の長方形の建物跡と想定した。長軸は南北方向に合致して建てられている。想定に用いた柱穴から面積を試算すると約18.8㎡，柱穴間の幅は平均で190cm，全柱穴の径と深さは平均でそれぞれ33cm，39cmである。南辺の柱穴を除くと比較的柱穴の深さや形状は揃っている。西辺の柱穴から遺物が出土しているが，ごく小片で建物との関係の詳細は不明であった。

掘立柱建物跡８（第26図）

Ｊ・Ｋ－26・27区で発見された。北辺のみ柱穴が１個多く南辺は柱穴の間隔がやや不揃いであるが，プランとしては３間×３間の正方形の建物跡と考えられ，方位に従って建てられている。柱芯間で計測した場合の面積は約26.2㎡，東西辺での柱穴間の幅は平均で128cm，全柱穴の径と深さは平均でそれぞれ48cm，31cmである。柱穴の深さや形状は，いずれもほぼ似かよっており，埋土の分層ができた柱穴には，Ⅲ層のブロックが含まれているものがほとんどで，分層されていない柱穴は黒色土が入っていた。南西隅の柱穴からは土師器の小片が出土しているが，埋土上位であることから建物に関連する遺物とは判断しなかった。

掘立柱建物跡９（第27図）

Ｊ－25区で発見された。西辺の柱穴列を確認できなかったが，プランとしては２間×３間の長方形の建物跡と考えられ，ほぼ方位に従って建てられている。柱芯間で計測した場合の面積は約24.3㎡，確認できた柱穴間の幅は平均で141cm，柱穴の径と深さは平均でそれぞれ26cm，29cmである。柱穴の深さや形状にはややばらつきがあるが，埋土にはほとんどⅡ層とⅢ層が混ざった土が入っていた。特に，北東角にある柱穴のろうと状の掘り込み断面の上部（広がった部分）は，柱痕跡は確認できなかったものの埋土が筋状に堆積していた。

また，東辺の北から２個目の柱穴と南辺中央及び南西隅の柱穴には，近接して柱穴が発見され，それぞれ形状が類似することから，建物と関係がある柱穴と考え図化している。

なお，遺物が出土した柱穴もあったが，埋土中からごく小片での出土であったため，建物に関連する遺物とは判断しなかった。

ちなみに，本章の末尾ではあるが，本遺跡で発見された掘立柱建物跡の平面図を縮尺を揃えて掲載したので，参考とされたい。（第53図）

焼土（第28・29図）

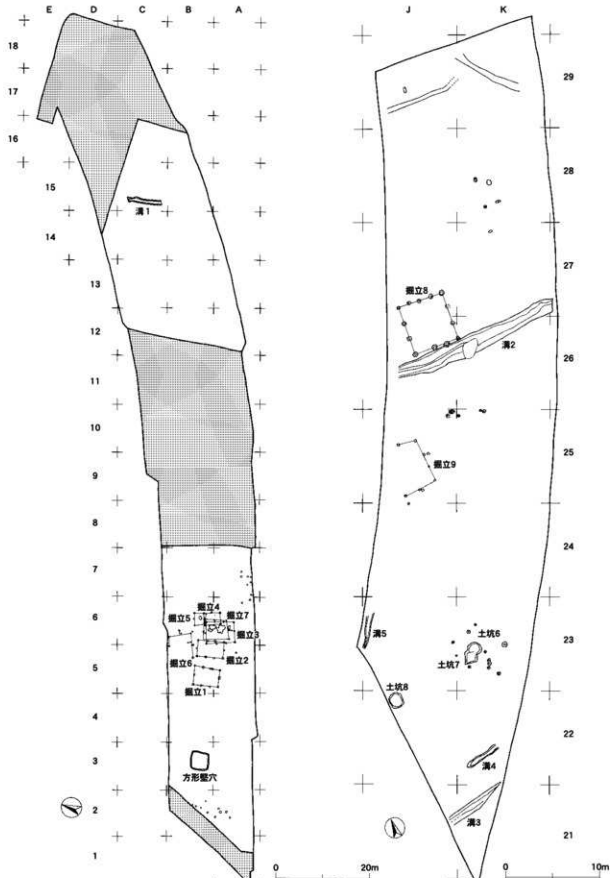
平成11年度のＡ・Ｂ－６区から５か所で発見された。

３，４は，近接して発見された。複数の焼土塊の周辺に被熱した範囲が認められ，若干遺物も伴っている。被熱範囲は地下まで及んでいる部分もあり，ある程度継続して使用されたものか，一定程度の高火力の施設が地上にあったものと想定される。

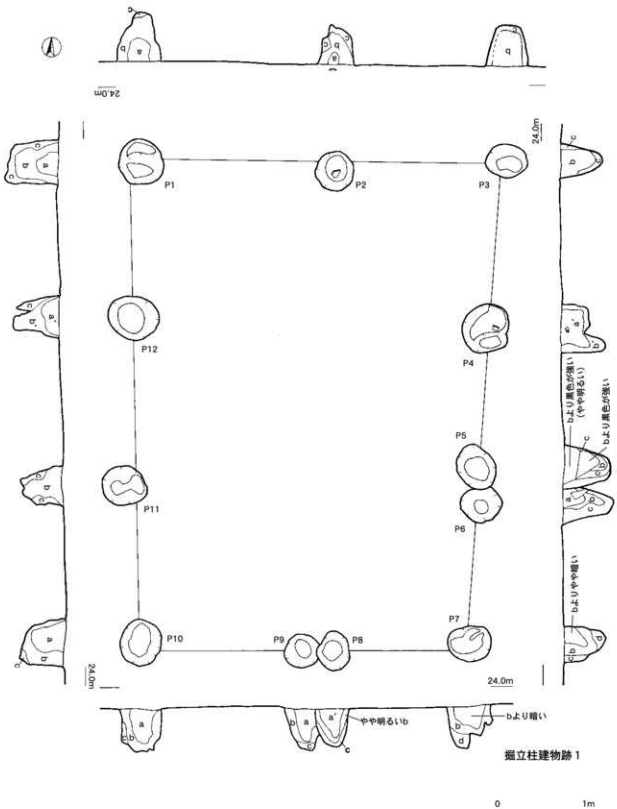
１，２は被熱範囲のみ認められたが，範囲は地下にも及んでいる。

５は，被熱範囲は認められず，焼土塊のみ確認された。

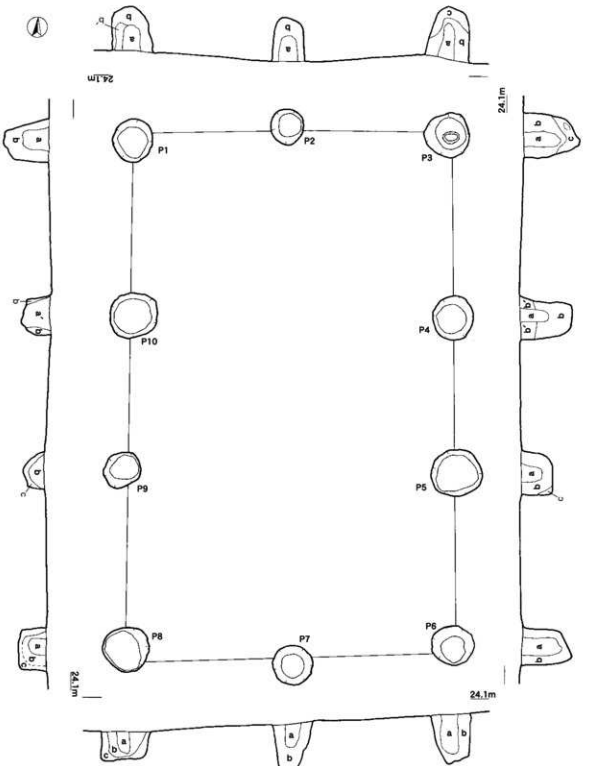
これら５基の焼土域は，位置関係から掘立柱建物跡群と関係する遺構と考えられる。



第19図　古代遺構配置図

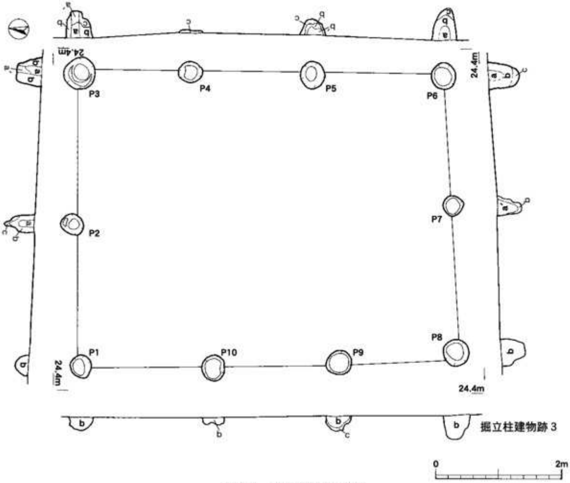


第20図　古代遺構実測図(1)



第21図　古代遺構実測図(2)

0　1m



第22図　古代遺構実測図(3)

掘立柱建物跡1

主軸方向	桁行(m)	桁行柱間(m)		梁間(m)	梁間柱間(m)
N−4° W	P1−P10	P1−P12 1.24	P12−P11 1.44	P1−P3	P1−P2 1.72
	5.46	P11−P10 1.28		4.1	P2−P3 1.46
	P3−P7	P3−P4 1.42	P4−P5 1.06	P7−P10	P7−P8 1.1
	5.42	P6−P7 1.16		3.6	P9−P10 1.36

柱穴No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長径(cm)	52	44	45	58	50	46	47	44	35	52	50	58
短径(cm)	47	42	38	50	41	40	40	37	37	44	43	48
深さ(cm)	58	44	46	50	53	51	45	46	41	48	47	51

掘立柱建物跡2

主軸方向	桁行(m)	桁行柱間(m)		梁間(m)	梁間柱間(m)
N−7° W	P1−P8	P1−P10 1.38	P10−P9 1.2	P1−P3	P1−P2 1.26
	5.42	P9−P8 1.52			P2−P3 1.28
	P3−P6	P3−P4 1.48	P4−P5 1.16	P6−P8	P6−P7 1.28
	5.4	P5−P6 1.38			P7−P8 1.38

柱穴No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長径(cm)	46	39	50	47	55	47	44	51	42	50		
短径(cm)	42	35	47	43	50	42	41	46	35	45		
深さ(cm)	49	48	61	56	34	54	53	37	22	31		

掘立柱建物跡3

主軸方向	桁行(m)	桁行柱間(m)		梁間(m)	梁間柱間(m)
N−9° W	P1−P8	P1−P10 1.75	P10−P9 1.67	P1−P3	P1−P2 1.67
	6.05	P9−P8 1.5		4.7	P2−P3 2
	P3−P6	P3−P4 1.35	P4−P5 1.55	P6−P8	P6−P7 1.7
	5.85	P5−P6 1.7		4.4	P7−P8 1.95

柱穴No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長径(cm)	38	38	53	39	44	43	35	45	32	40		
短径(cm)	35	32	48	33	40	39	33	39	39	34		
深さ(cm)	23	48	43	5	25	48	40	40	24	13		

掘立柱建物跡4

主軸方向	桁行(m)	桁行柱間(m)		梁間(m)	梁間柱間(m)
N−17° W	P1−P3	P2−P3 1.78		P3−P5	P3−P4 1.32
	2.5			4.98	P4−P5 1.4
	P5−P6	P5−P6 1.94		P6−P1	P6−P1 2.94
	2.36			3.36	

柱穴No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長径(cm)	43	33	49	29	43	40						
短径(cm)	26	29	39	27	41	33						
深さ(cm)	23	23	53	21	25	40						

掘立柱建物跡1

a	:黒色硬質土(柱痕跡)
a′	:aより軟質
b	:橙色火山灰混黒褐色軟質土
b′	:bより橙色火山灰をやや多く含む
c	:橙褐色土(軟質)
d	:暗茶褐色土(黒色土混じり)

掘立柱建物跡3

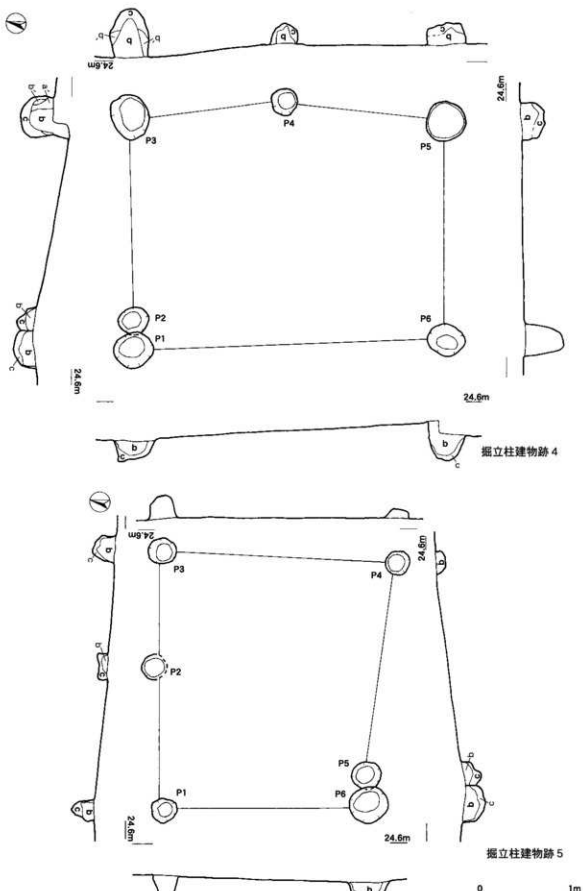
a	:黒色硬質土(柱痕跡)
a′	:aよりやや軟質
b	:橙色火山灰混黒褐色軟質土
b′	:bよりやや暗い
c	:橙褐色土

掘立柱建物跡2

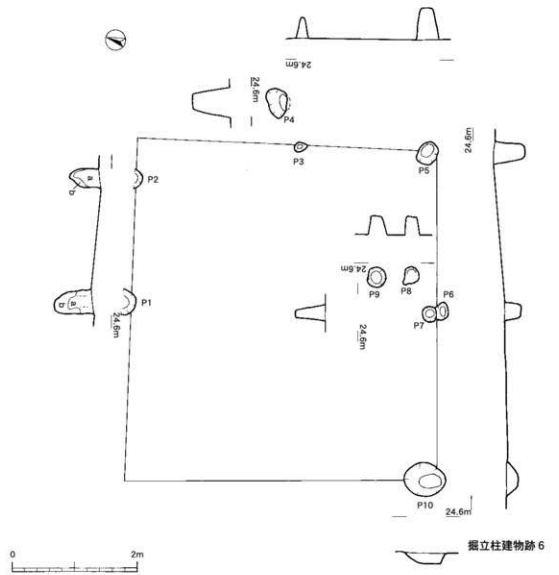
a	:黒色硬質土(柱痕跡)
a′	:aより軟質
b	:橙色火山灰混黒褐色軟質土
b′	:bよりやや暗い
c	:橙色土(軟質)
d	:橙色火山灰混明茶褐色土
e	:黒色土

掘立柱建物跡4

a	:黒色硬質土(柱痕跡)
a′	:aよりやや明るい
b	:橙色火山灰混黒褐色軟質土
b′	:bよりやや明るい
c	:橙褐色土



第23図　古代遺構実測図(4)



第24図　古代遺構実測図(5)

掘立柱建物跡5

主軸方向	桁行(m)	桁行柱間(m)										間間(m)	最間柱間(m)
N−76° E	P1−P6 2.16	P1−P2 1.34										P1−P3 2.78	P1−P2 1.90 / P2−P3 0.88
	P3−P4	P3−P4 2.24										P4−P6 2.60	P4−P6 2.60
柱穴No.		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長径(cm)		28	28	31	26	33	43						
短径(cm)		25	26	27	24	29	26						
深さ(cm)		24	12	25	9	23	23						

掘立柱建物跡6

主軸方向	桁行(m)	桁行柱間(m)										間間(m)	最間柱間(m)
N−77° E		P2−P3 2.41		P3−P5 1.15								P1−P2 1.97	P1−P2 1.83
												P5−P10 5.19	P5−P6 2.81 / P6−P10 2.24
柱穴No.		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長径(cm)		41	31	22	48	38	26	29	32	33	65		
短径(cm)		29	12	17	29	32	24	19	29	29	53		
深さ(cm)		59	46	32	62	48	48	26	29	29	15		

掘立柱建物跡7

主軸方向	桁行(m)	桁行柱間(m)										間間(m)	最間柱間(m)
N−5° W	P1−P7 5.68	P1−P2 2.46		P2−P5 0.41								P1−P2 2.6	P1−P2 2.3
	P2−P4 4.66	P2−P3 1.66		P3−P4 2.28								P4−P7 4.06	P4−P5 1.86 / P5−P7 1.66
柱穴No.		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長径(cm)		30	49	35	28	30	33	35					
短径(cm)		25	47	29	26	23	29	30					
深さ(cm)		69	46	18	21	40	50	24					

掘立柱建物跡5

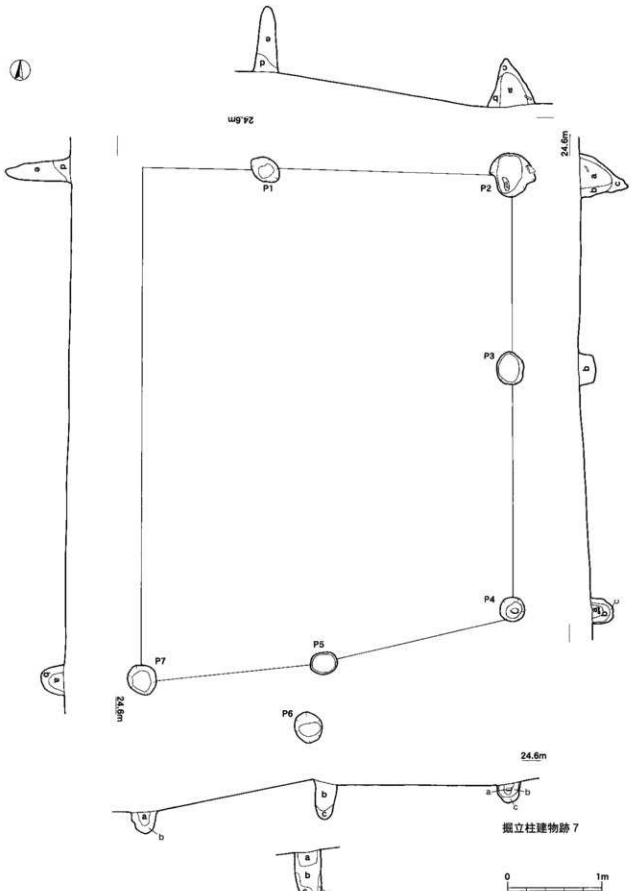
a	黒色硬質土(柱痕跡)
a′	aよりやや明るい
b	橙色火山灰混黒褐色軟質土
b′	bよりやや明るい
c	橙褐色土

掘立柱建物跡6

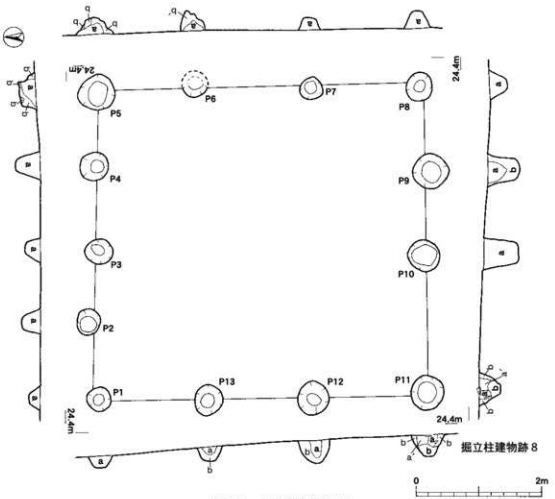
a	黒色硬質土(柱痕跡)
b	橙色火山灰混黒褐色軟質土

掘立柱建物跡7

a	黒色硬質土(柱痕跡)
a′	aより軟質
b	橙褐色火山灰混黒褐色軟質土
b′	bよりやや暗い
c	橙褐色土(軟質)
d	橙褐色火山灰混明茶褐色土
e	黒色土



第25図　古代遺構実測図(6)



第26図　古代遺構実測図(7)

掘立柱建物跡8

主軸方向	桁行(m)	桁行柱間(m)			梁間(m)	梁間柱間(m)	
N−3°−W	P5−P8	P5−P6 1.67	P6−P7 1.67		P1−P5	P1−P2 0.67	P2−P4 0.99
	5.25	P7−P8 1.34			4.96	P3−P3 0.73	P4−P8 0.67
	P11−P1	P11−P14 1.26	P13−P13 1.16		P8−P11	P9−P9 0.85	P10−P11 1.83
	5.3	P13−P1 1.87			5	P9−P10 0.85	
柱穴№		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
長径(cm)		40	42	44	46	52	43	37	47	58	53	57	53	48
短径(cm)		37	36	41	41	51	37	32	34	46	37	51	54	50	44
深さ(cm)		28	30	28	28	30	27	34	20	27	30	37	35	24	24

掘立柱建物跡9

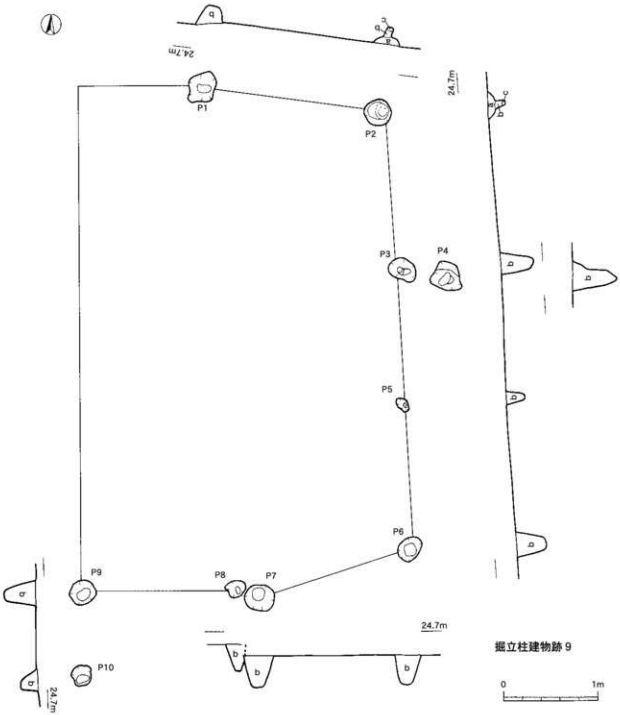
主軸方向	桁行(m)	桁行柱間(m)			梁間(m)	梁間柱間(m)
N−8°−W	P1−P9	P1−P2 1.97			P1−P2	P1−P6 1.66
	5.55				1.95	
	P2−P6	P2−P3 1.43	P3−P5 1.56		P6−P9	P6−P7 1.56
	4.65	P5−P6 1.52			3.55	P7−P9 1.55
柱穴№		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長径(cm)		40	30	25	30	18	30	33	21	29	25
短径(cm)		29	29	20	30	11	22	29	18	26	21
深さ(cm)		28	19	30	49	21	32	38	29	34	18

掘立柱建物跡8

a	黒色土
a′	黒色土（やや黄味をおびる）
b	黒褐色土
b′	黒褐色土（やや橙色をおびる）

掘立柱建物跡9

a	黒色土の混土で筋状に堆積
b	黒色土とアカホヤの混土
c	暗灰褐色のブロック



第27図　古代遺構実測図(8)

方形竪穴遺構（第30・31図）

平成11年度調査区のＢ－３区から，方形竪穴遺構が１基発見された。約3.72m×3.79mのプランで，検出面からの深さは約43cmである。竪穴遺構内及び掘込み面周辺には，遺構に伴うと想定できるような柱穴は発見できなかった。一方，床面中央には焼土域が確認されたほか，床面の西半一帯には，焼土域を囲むように浅い掘込みが広く確認された。

埋土は，２層に分層できた。ほとんどはアカホヤパミスを含み非常に細かく粘性の低い黒褐色砂質土で，床面直上には，土質は類似するがアカホヤパミスをほとんど含まない埋土が堆積していた。掘込み内には，同じく土質が類似しながらもアカホヤの混じり具合の違いにより分層できる土が堆積していた。掘込み内と住居内埋土では，感覚的ではあるが硬さに著しい差異は感じられなかった。

このほか，遺構の上場南角で土師甕の埋設遺構が発見された。遺構との関連性については厳密には確証はないものの，関連性を否定する情報もないので，ここでは関係する施設として紹介したい。埋設遺構の掘り込みは径約32cmの円形で，土師甕がゆっくり入る大きさである。深さは検出面から約24cmの断面Ｕ字型で，土師甕にあうように掘られている。埋土及び甕内部には炭や炭化物は確認されなかったほか，甕内部の土は建物の埋土に類似した黒色砂質土であった。

埋置されていた土師甕（37）は，丸底の底部からほぼ球形の体部という器形で，頸部で一端すぼまり，口縁部は湾曲しつつ外反する。口縁部断面は舌状で厚みがある。器面調整は，外面は丁寧なナデ，内面はケズリである。底部内面には円形の圧痕が観察されるほか，頸部内面にはケズリ工程の前に棒状の工具による擦痕が部分的に観察される。

口縁部に若干の欠損部がある以外，欠損部は確認できず，ほぼ完形である。口縁部の欠損に人為性を認めうるか判断は困難であるが，破片が周辺で確認されていることから，人為性の程度は低い可能性はある。

土坑（第32図）

平成12年度のＪ・Ｋ－22・23区から３基発見された。６，７は切り合って発見されているが，埋土の状況から，７が後出と判断された。遺物等は発見されなかった。周辺には，建物の復元には至らなかったが，柱穴が集中していることから何らかの簡易な上屋があった可能性もある。

８は，略円形の平面プランで径は約125cm，検出面からの深さは平均して約28cmである。斜面に構築されており，周辺に柱穴は確認されていない。埋土中から土師皿などの遺物が複数発見されたほか，焼土塊も発見されている。埋土は２層に分層できた。

溝状遺構（第33，34図）

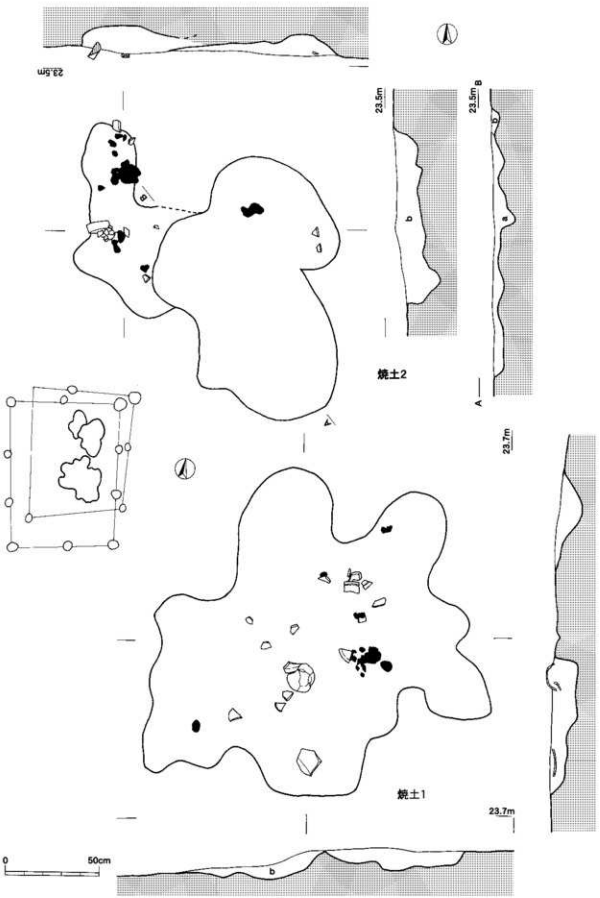
平成11年度調査区で１条，平成12年度調査区で５条確認された。

平成11年度調査区で発見された溝状遺構は，掘立柱建物跡群や竪穴建物が集中したＢ地区ではなく，Ａ地区で発見された。南北方向に直線的に走り，途中で途切れている。残っている部分で，長さ7.46m，深さ0.46m，断面は浅い逆台形である。溝床面には一部で柱穴も発見されている。

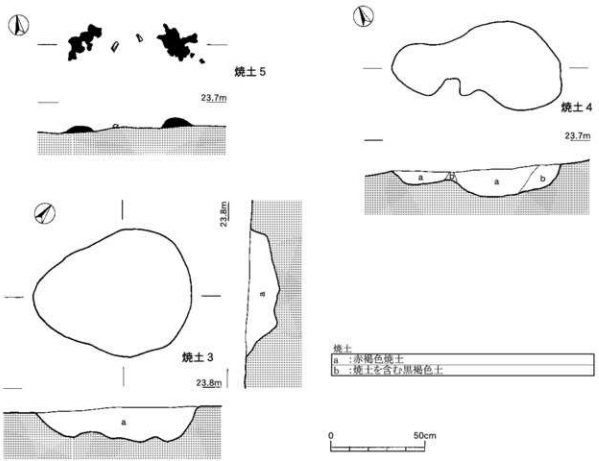
平成12年度調査区で発見された溝状遺構は，形状にばらつきがある。掘立柱建物跡８と近接して調査区中央を横断するように発見された２は，東西方向に直線的に走り，調査区外へ続いている。床面は，西半で深く東へ次第に浅くなっている。断面も，西側では逆台形であるが，東側ではレンズ状になっている。西半の床面には一段低い構造があることから，東西での深さの違いは本来のものである可能性もある。

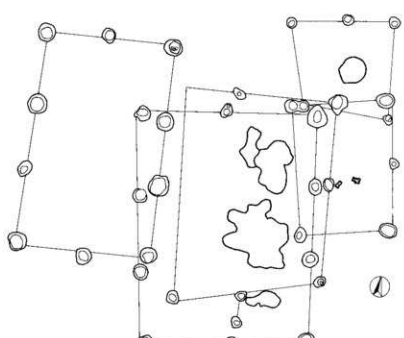
３，４は，Ｊ・Ｋ－21・22区で発見された。２と同じく東西方向に直線的に掘られているが，４は途中で終わっている。２より規模は小さいものの，断面は逆台形でしっかりと残っている。

５は，２，３，４と離れたＪ－23区から発見された。方向も他とは異なる北東－南西方向で掘られている。断面形状は逆台形で整っているしているものの，平面形状はやや蛇行しており，他とは用途が異なる可能性が考えられる。

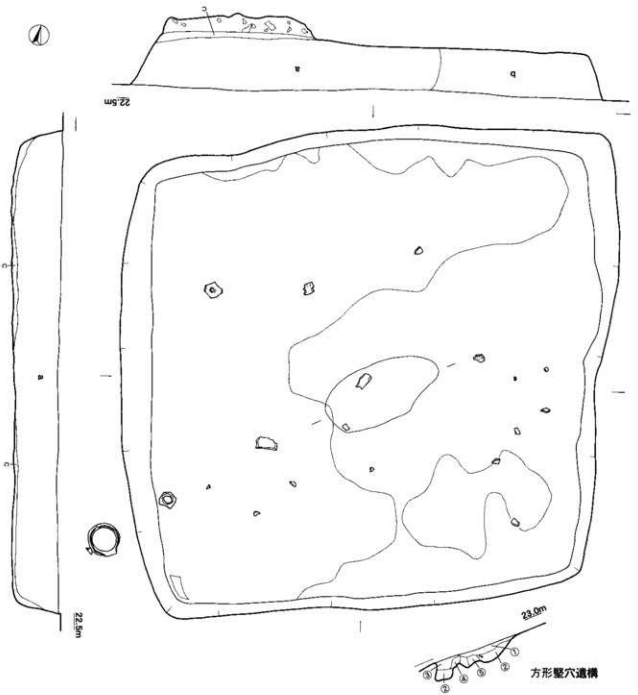


第28図　古代遺構実測図(9)



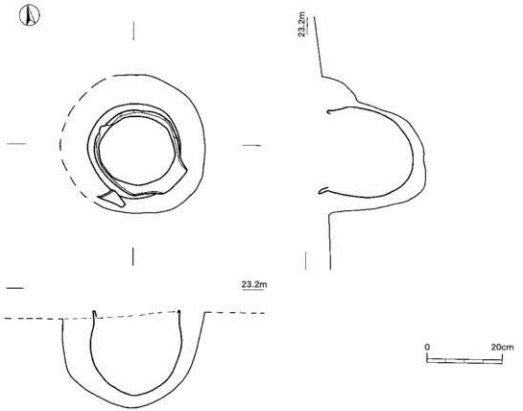


第29図　古代遺構実測図(8)（掘立柱建物跡と焼土の位置関係）

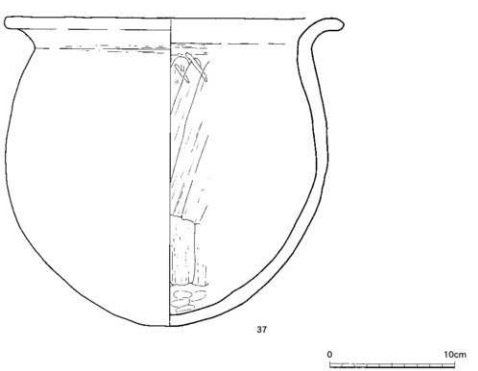


長さ(m)	3.79	幅(m)	3.72	深さ(m)	0.40
堆土の特徴等					
a ：黒褐色砂質土(アカホヤパミスを多く含む)					
b ：黒褐色砂質土(アカホヤパミスをほとんど含まない)					
c ：黒褐色混パミス土					
① ：黒褐色砂質土					
② ：暗茶褐色砂質土					
③ ：①と②の混合層					
④ ：茶褐色砂質土					
⑤ ：褐色砂質土					

第30図　古代遺構実測図(11)



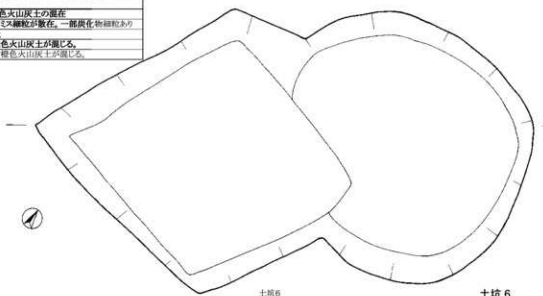
第31図　古代遺構実測図(2)（土師甕埋納状況）



土坑7

長さ(m)	1.69	幅(m)	1.50	深さ(m)	0.54

埋土の特徴等	
a	:黒褐色土に黄**橙色火山灰土の混在**
b	:暗黒褐色土に**パミス細粒が散在。一部炭化**物細粒あり
c	:黄橙色火山灰**土**
d	:黒褐色土に黄**橙色火山灰土が混じる。**
e	:黒褐色土に暗黄橙色火山灰土が混じる。



土坑6

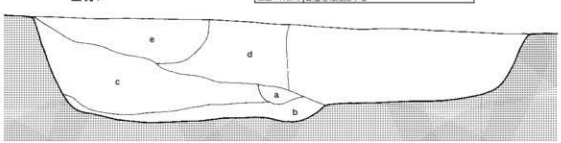
長さ(m)	1.28	幅(m)	1.43	深さ(m)	0.38

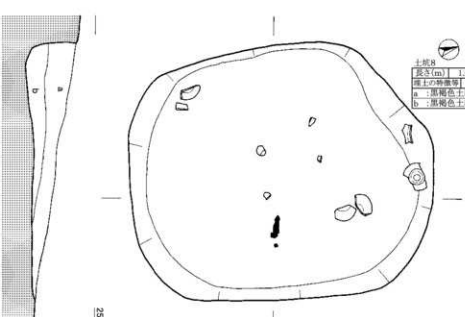
埋土の特徴等	II層を埋土とする

土坑6

25.0m

土坑7





土坑8

長さ(m)	1.61	幅(m)	1.35	深さ(m)	0.28

埋土の特徴等	
a	:黒褐色土に黄色パミス細粒が混じる。
b	:黒褐色土に黄色パミス細粒が多く混じる。

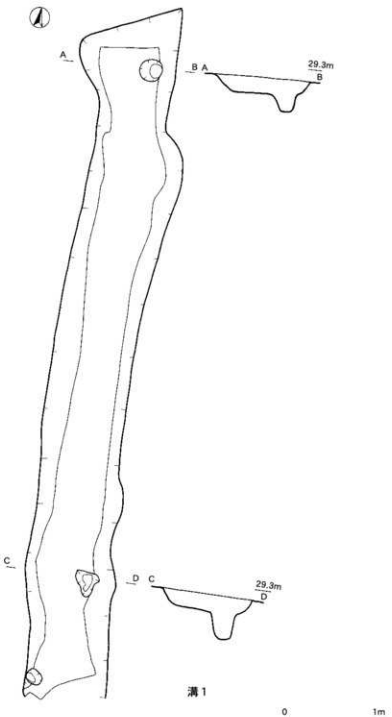
土坑8

25.3m

25.3m

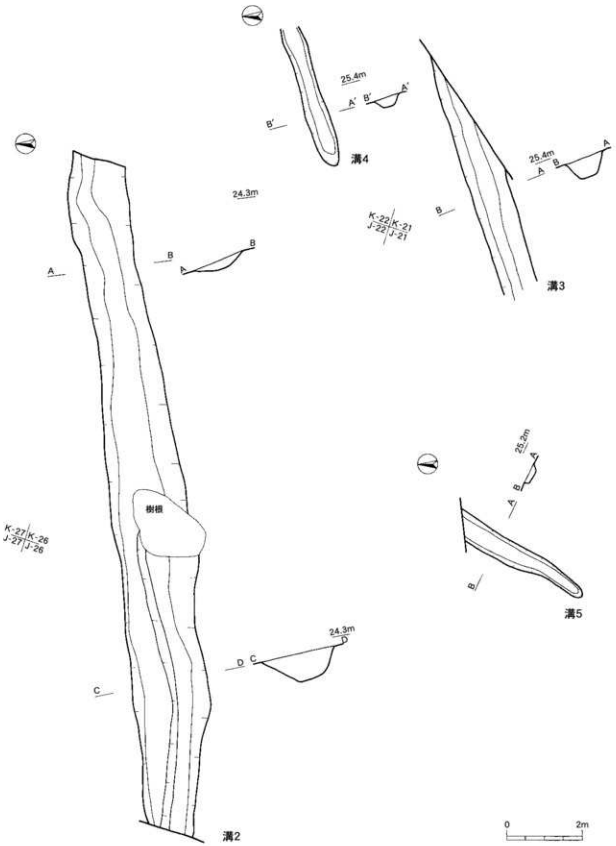
0 50cm

第32図　古代遺構実測図⑬



B-14 B-15
C-14 C-15

第33図　古代遺構実測図(4)



第34図　古代遺構実測図(5)

遺物（第35図38～第41図132）

土師器，須恵器，陶器などが出土した。本報告で紹介するものは，柱穴の埋土から出土した例などはあるが，埋土の上位からがほとんどで全体的には遺構に伴うと想定できる資料は少なく，包含層出土の資料が主である。また，小片が多く図化できるものは多くなかった。

土師器（第35図38～第37図90）

皿，坏，甕が出土した。以下，器種ごとに概説していきたい。

皿は，全体的に体部が直線的に立ち上がり，底部との境界が比較的鋭角に成形された資料がほとんどである。38～41は，口縁部を薄くごくわずかに外反させて仕上げ，器高に比して底径が大きめとなる器形をもつタイプと，45，46のように，体部から口縁部にかけてほぼ均一にやや分厚く仕上げ，器高に比して底径が小さめのタイプに大別できる。また，これら以外に，52，54のように底部との境界を丸めたものや，55～57のように底部に張出しをもたせているのものもみられた。

38は，口縁部がややひずんでいる。胎土に小礫を含む。42は，内面見込み部に指頭押圧痕が観察される。40は，土坑８から発見された資料である。底部は磨耗のため観察できなかった。43は，平成12年度調査区の溝状遺構の埋土中から発見された資料である。45は，土坑８から発見された資料である。底部及び底部外面には，ケズリ様の器面調整が施されている。46は，ろくろ整形の痕跡が比較的明瞭に残る資料である。47も，底部に45と同様の器面調整が施されている。底部の厚みのわりに体部の厚みが極端に薄い。50は，溝２から発見された資料である。52は，焼土１から出土した資料である。底部にやや丸みを持たせる器形である。54は，溝２から発見された。

坏は，58，59のように器壁の薄い体部が開いて直線的に立ち上がり，高台が高くハ字状に整形されるタイプ，63，64のように直線的に成形されつつも体部が深みをもち，底部は平坦に整形されるタイプ，68のように体部が丸みを帯びるタイプなどがある。

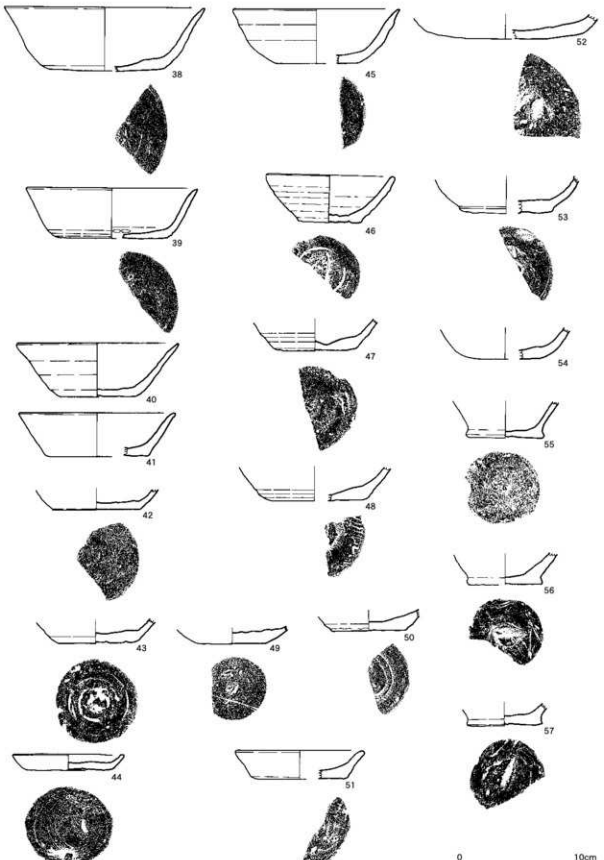
58は，土坑８から発見された資料である。59は，内面に赤色顔料が塗布されている。高台の磨耗が著しく，本来はもう少し長かった可能性がある。62は，溝２から発見された資料である。63は，体部と高台との接合面を観察できる資料である。接合部のみ１～２条の溝を切っている。胎土のきめが細かい。64は，土坑７から発見された資料である。65は，見込み及び高台内面に赤色顔料が塗布されている。本遺跡で発見された坏のなかでは，比較的器壁が厚い。66，67も見込みに赤色顔料が塗布されている。66は，胎土に砂粒をわずかに含んでいる。体部の厚みに比べ，高台は薄い。68は，溝２から発見された。本遺跡の坏では大形の部類に入る。丸みを帯びた体部や薄く仕上げられた口縁部，外面は部分的に光沢を帯びるなど，整った器形を持つ。見込み部は黒色になっている。69も内黒である。高台内面の成形に特徴のある資料である。胎土のきめはやや粗い。71は，平面形が楕円に成形された資料である。高台内面にはススのようなものが付着している。72は，他の資料と高台の成・整形が異なる資料である。高台径も大きく，盤のような器形を有している。胎土に赤色粒を含んでいる。73は，小振りな成形でありながら体部が分厚く立ち上がりの強い器形である。胎土のきめは細かいが赤褐色の色調を呈しており，特徴的である。

74～77は，土錘である。時期については中世に帰属する可能性もあるが，遺跡の主体である古代でひとまず掲載した。比較的整形が丁寧なのは74と77である。

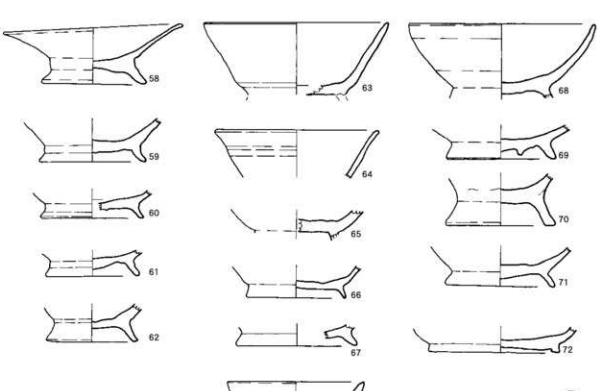
78は，刻書されている可能性がある小片である。この資料のみ原寸大で掲載した。字体は不明であるが，「阿多」の「阿」の下半であるという意見もある。

甕は，破片が多く図化できるものは少なかったが，口縁部資料を中心に掲載した。皿や坏に比して出土量が多い印象がある。

79～84は，口縁部資料を一括した。本遺跡では，これらのような断面形状をした甕が出土　資料の大半を占める。なお，方形竪穴遺構に伴って発見された甕と同様の口縁部形態をした甕は，85以外にほとんどなかった。83は，胎土が比較的精製されているためか，軽く，磨耗も顕著である。82の内面屈曲部には，横位のハケメ調整のほか，斜位のハケメ調整も施されている。85は，方形竪穴遺構の埋土中で発見された。外面の調整が丁寧に施されている。86は，全体的に薄手で，胎土も比較的精製されている資料である。磨耗して観察しづらい部分もあるが，内面のケズリ調



第35図　古代遺物実測図



第36図　古代遺物実測図

整も丁寧で，図化できなかった。87は，柱穴の埋土から発見された資料である。全体的に丸みを帯びた器形をしている。外面には丁寧なヨコナデが観察できるが，胎土の厚みは均一でなく，他に比してやや粗雑な印象を受ける。88にみられるケズリの工具は，他の資料よりも幅が狭いのが特徴である。90は，底部と想定した資料である。内面はケズリ調整であるが，底部内面のみ丁寧なナデ調整が施される。ススの付着が確認できる。

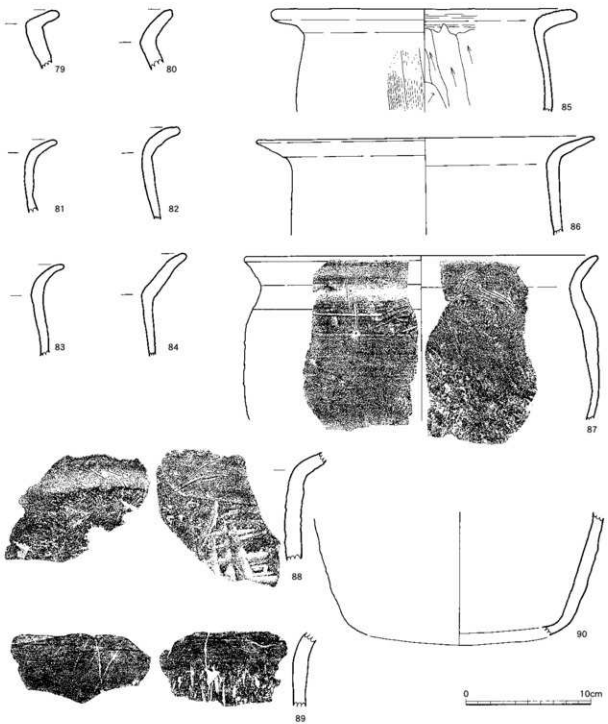
須恵器（第38図91～第41図132）

須恵器も，坏，皿，小型壺，壺，甕など多様な器形のものが出土した。

91～101までを坏としてまとめた。坏は，口径に比して器高の低い器形を有し，体部は直線的に立ち上がるものがほとんどである。高台も短く踏ん張るものが多く，整形はやや雑なものが目立つ。91は，内外面とも自然釉が付着している。92は，口縁がわずかにひずむ。94は，焼土付近で出土した資料である。97は，器壁が小豆色に鈍く光沢を放っているのが特徴である。101は，器壁が淡紅色を呈する特徴的な坏で，火襷が内面に観察できる資料である。なお，同一個体と思われる破片が他に数点出土しているが，接合できなかった。

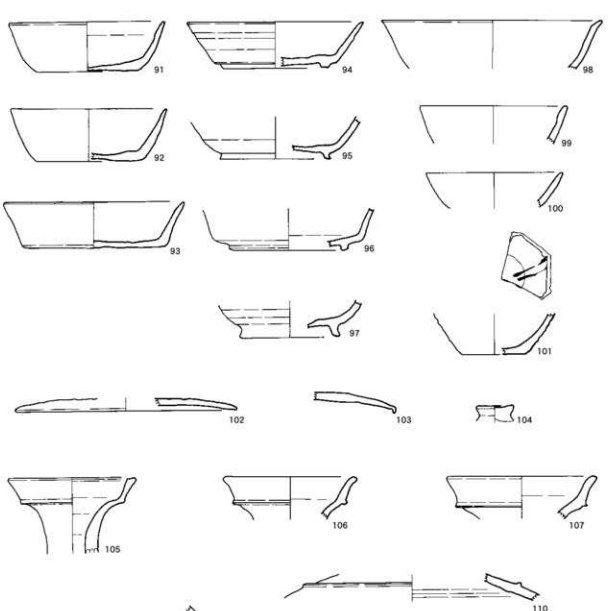
102～104は，蓋である。104は，土師器的な胎土の風合いをしている。

105～112は，小片が多いが，小形壺と考えられる資料をまとめた。105は，平面形がやや楕円形に整形されている。110は，肩部に断面方形の凸帯を有する壺と想定される資料である。上部側断面がわずかに擦れているが，詳細は不明である。109は，ややそろばん玉状の胴部に，わずかに下垂する断面略台形の凸帯がつく器形を有する。112は，壺の口縁部の可能性があるが，詳細は不明である。器壁の薄さと曲線的な器形が，想定される口縁径の大きさと違和感を持たせる資料である。



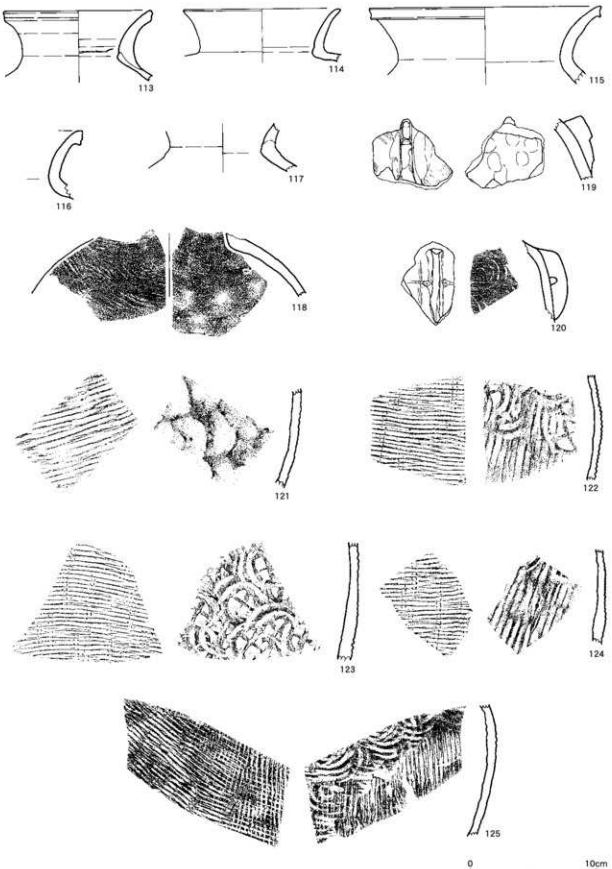
第37図　古代遺物実測図（土師器）

113～132までは，壺，甕類をまとめた。主に内面の当て具により細分しているが，胎土の色調などの特徴から，ほとんどの資料は荒平産のものと思われる。113～117は，比較的小形で短頸である。口唇部外面に沈線が1条施文されるものとそうでないものがある。114は，口唇部に凸帯などの加工を施さず，先すぼまりに仕上げている。また，口縁部内面と頸部屈曲部に灰釉がついている。118，119，121の内面には球形の当て具痕跡が認められ，布状の圧痕が観察できる。122～125の内面には，南部九州の須恵器壺にみられる車輪状の当て具が明瞭に残る。特に122，124，125は，製作途中で当て具を換えていることがわかる資料で，なかでも125は，当て具の変換と胎土

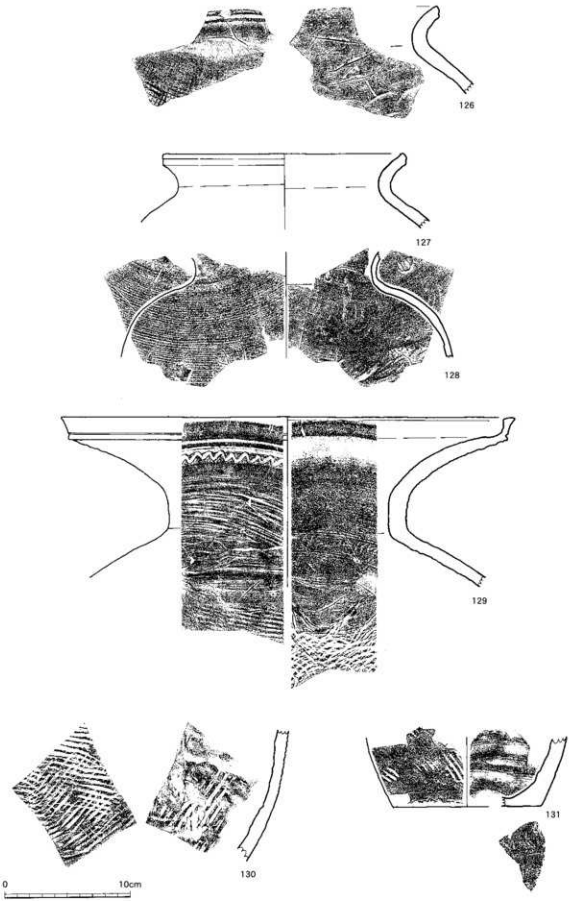


第38図　古代遺物実測図（須恵器）

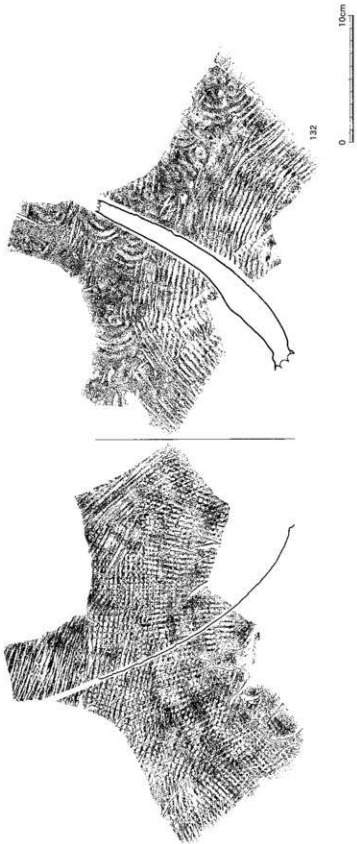
の継目が一致しているという，製作工程を探る上で興味深い資料である。127は，タタキ技法による成形のあと，横位のナデ整形により仕上げられていることが外面の観察からわかる。128には，頸部内面に３条を１単位とする浅い刻目が等間隔に並んでいるのが観察できる。129は，短い頸部から大きく開く口縁部の上端を直立させる器形をもつ甕で，口縁の屈曲部下に小波状文が施文される。また，口縁部外面にはタタキ痕を残す一方で内面にはタタキ痕が残らない。132は，甕の胴部下半であると思われ，125などと同様に製作過程を探ることができる資料である。



第39図　古代遺物実測図（須恵器）



第40図　古代遺物実測図（須恵器）



第41図　古代遺物実測図（須恵器）

中世～近世（第42～44図）

両年の調査区で古道跡が1条，溝状遺構が3条発見された。遺物は，土師器や染付などがわずかながら出土している。

遺構（第42・43図）

中世の古道跡が1条，平成11年度のA地区から発見された。樹木やイモ穴によってだいぶ破壊されているが，南北方向に走り，残存部で長さ11m，深さ0.38mで，しっかりした施設であった可能性がある。部分的に硬化面も確認されている。

近世の溝状遺構は，平成12年度調査区のJ－22～K－24区から3条発見されている。東西南北方向に走り，方位を意識しているかのような出土状況を示している。断面は浅く，レンズ状に掘られている。硬化面等は確認されておらず，微妙に不安定な形状から，畑境などの用途が，調査担当者のコメントとして残っている。

遺物（第44図133～141）

中世

土師器・瓦質土器・土師質土器がある。

133は，口縁直径が8.5cm，高さが1.2cm，底部直径が6cmある土師器皿である。口縁部は薄くなって端部に至り，底部はややでこぼこしている。外面は横方向のナデ整形で，内面ヘラナデ整形である。白っぽい褐色を呈しているが，外面には黄茶褐色の火襷様圧痕がみられる。石英粒などを含む細かい土を用い，焼きは良い。

瓦質土器（134）は，茶釜の把手部分である。突起部に直径8cmほどの孔が穿たれ，その延長部に溝状のくぼみがある。外面は丁寧なヘラナデ，内面も横方向のヘラナデで仕上げているが，把手部の内側には指頭圧痕もみられる。外面は灰黒褐色を呈しているが，その上の一部に白っぽい粒質土が付着している。内面は白みがかった淡い灰褐色を呈している。白色石をいくらか含んでいるが，石英微石の多い細かい土を用いている。焼成土は普通である。

135は，土師質の擂鉢である。外へ開きながらまっすぐ口縁部へ伸びる器形を呈し，端部は丸みをおびた矩形を呈している。カキ目は幅が広く，下から上へかき上げている。内外ともていねいなヘラナデで仕上げている。内面は，使用によって擦れている。内外とも緑がかった黄茶褐色を呈しており，焼成度は良い。赤みのある茶色石など細かい石粒を含むが，致密な土を用いている。

近世

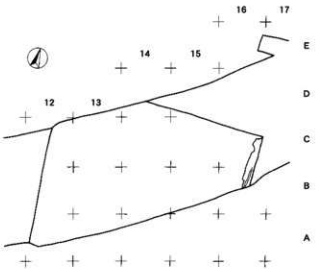
土師質土器・磁器・陶器・土人形がある。

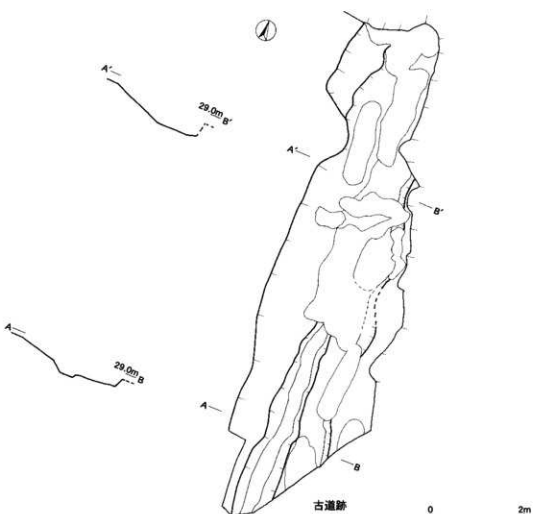
土師質土器（140）は，多孔のある甑である。内外ともナデ仕上げだが，外には上から下へのカキ目がある。底の孔は2個が確認でき，孔は外から内へあけている。内側に白い付着物がみられる。黄みがかった白灰色を呈しているが，内側は灰色が強い。焼成度は良好で，細かい土を用いている。

136は，白っぽい釉のかかった染付で，外面に直線と菱形様のものを圏線で囲んだ模様がみられる。高台直径は5cmで，貼付部の内外には釉切れが目立つ。釉はやや緑っぽいが，外は白みが強い。貫入が内外に見られる。

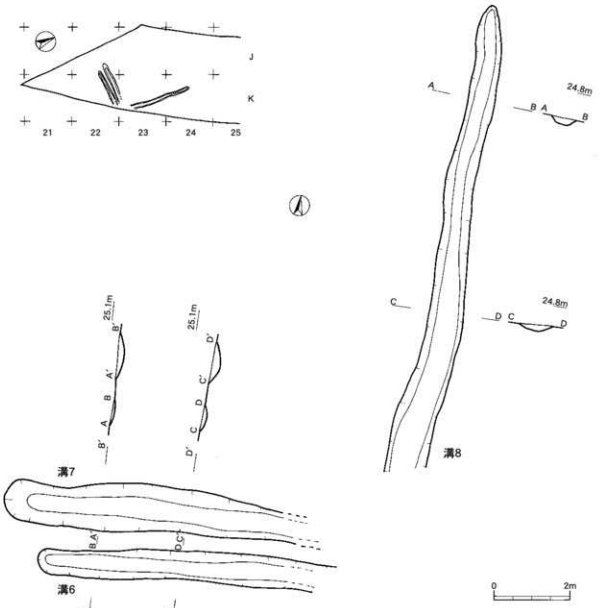
陶器には瓶子・壺・鉢がある。瓶子（138）は，長頸の肩から上の部分で，細頸である。赤っぽい茶褐色を呈し，内外とも白っぽい釉がかかっている。ろくろびきの痕がみられ，胎土は細かい。壺（137）は，外へ広がる高台付きのもので外面は黒っぽい釉がかかり，内面は赤っぽい茶褐色を呈している。高台直径は9cmで，白色の細石を多く含む土を用いている。鉢（139）は，あげ底となる直径8.4cmのもので，内外とも緑っぽい黒釉がかかっており，内側には白っぽいごま状の釉がみられる。外面の底近くは露胎となっている。白色石・石英などの多い細かい土を用いている。

141は，型押しで作られた薄い作りの土人形で，顔面と頭髪が残っている。顔面は白っぽい灰褐色で，頭髪は濃い灰色を呈している。厚さは2～5㎜である。

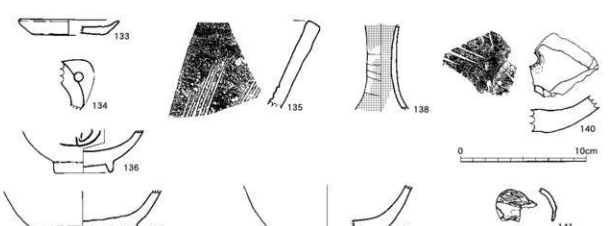




第42図　中世遺構実測図



第43図　近世遺構実測図



第44図　中近世遺物実測図

第２節１　平成16年度調査の概要

調査は，隣を通る国道270号のセンターラインを基準線として，１辺10mの調査範囲を設定し実施した。対象範囲が墓参道により二分されていたため，この状況も利用した。まず広いＡ－３～５区の表土を重機を用いて除去したのち，Ⅱ層以下を人力により掘り下げて，遺構調査，遺物取り上げを行った。この間に，狭いＡ－２区の表土を重機を用いて除去し，Ⅱ層以下を人力で掘り下げた。

その結果，一部残存していたⅡ層から古代，中世の遺物が散見されたほか，Ⅲ層で縄文時代後期の遺物，Ⅳ～Ⅴ層上面にかけては縄文時代早期の集石が１基と，前平式系土器がまとまって発見された。

第２節２　土層（第47図）

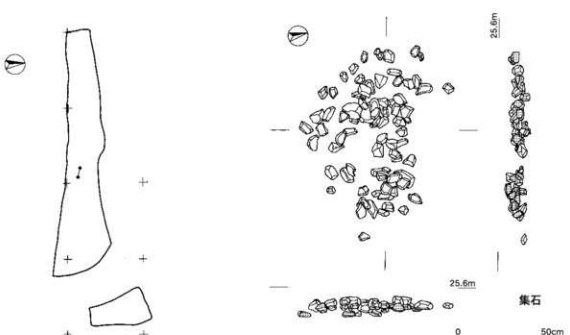
平成16年度調査区の土層も，平成11，12年度調査区の土層とおおむね特徴は一致する。ただし，耕作の影響によるものか，Ⅱ層はほとんど残存していなかった。

Ⅰ層（褐色土）	表土・耕作土
Ⅱ層（黒色土）	古代，中世の包含層
Ⅲ層（橙色火山灰土）	縄文時代後期の包含層（アカホヤ火山灰土層）
Ⅳ層（茶褐色土）	下部は縄文時代早期の包含層
Ⅴ層（黒褐色砂質土）	上部は縄文時代早期の包含層（サツマ火山灰（Ｐ14）含む）
Ⅵ層（茶褐色粘質土）	
Ⅶ層（暗茶褐色粘質土）	
Ⅷ層（淡黄白色砂質土）	上部は明黄色の軽石が混じる（ＡＴ火山灰層）

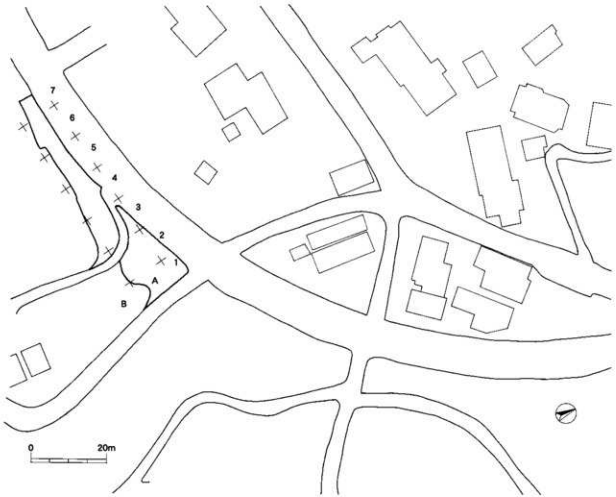
第２節３　遺構（第45図）

Ａ－４区Ⅳ層下部からⅤ層上部にかけてのところで発見された。

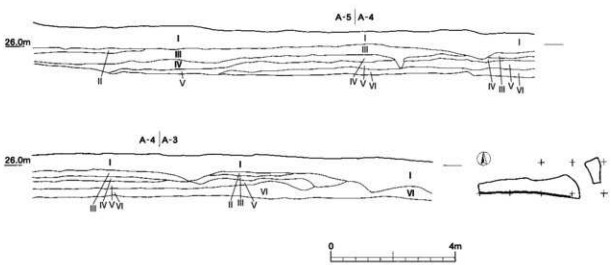
110cm×90cmの半円形の平面プランで，掘り込みは確認できなかった。礫総数80個，ほとんどが砂岩の角礫で著しく被熱したものは認められなかった。



第45図　遺構実測図（平成16年度）



第46図　調査範囲図（平成16年度）



第47図　土層断面図（平成16年度）

第２節４　遺物（第49図～第51図182）

Ⅱ層及びⅢ～Ⅴ層にかけて出土したが，主体はⅢ～Ⅴ層にかけて出土した縄文時代の遺物である。特に，Ⅳ～Ⅴ層から出土した早期の遺物が多く，台地端部の斜面ぎわでありながら，調査区全体で出土した。なお，Ⅲ層から出土した後期の遺物はより台地中央で出土している。Ⅱ層の出土状況は包含層の残存状況の悪さを反映したものと思われる。

縄文時代

土器（第49図142～第50図178）

器形は，142～158までのように口縁部まで直線的に立ち上がり平面形が円形となるものがほとんどであるが，159～166のように，平面形が方形状を呈する資料もある。内面調整は，175～178は，ナデ調整であるが，それ以外はすべてケズリ調整である。

口縁部文様は，142，144～146のように二枚貝の肋部を利用して数条の横位刺突文を施文する資料と，143のように二枚貝の頂部を用いて連続押圧文を施文する資料，147～149，159のように肋部もしくはそれと同様の形状をした施文具を利用して，斜位ないし縦位の連続刺突文１条を単位とし，それを横位に展開させ密な連続刺突文帯を施す資料に細分できる。

胴部文様は，175～178を除き，基本的に斜位ないし横位の条痕文であるが，159～166のように，条痕を地文としてさらに波状文や連続刺突文などを加えている資料もある。158は，方形の文様が施文されているように見えるが，172や174などの底部付近の資料と考えられる。166は，磨耗が著しいため詳細が不明だが，方形頂部の両脇に長めの連続刺突文を施文しているのが特徴的である。

底部資料は，167～174のように円盤状の平底が主に出土しているが，178のような上げ底で開く器形の底部も出土している。文様については，雑な斜位の条痕文がほとんどであるが，縦位のやや長い連続刻目文が重なる資料もある。

このほかでは，175は，３条単位の条痕で鋸歯文を描いており，177は，綾杉状の条痕文をわずかに観察できる。176は，二枚貝の肋部により斜位の条痕文が施文されている。

器形や胎土，文様などから，142～158にみられる特徴を有する一群と，159～166にみられる特徴を有する一群，それに175以下の資料に細分できると考えられる。底部資料は，167～174は，142～158の群に伴うと考えられる。

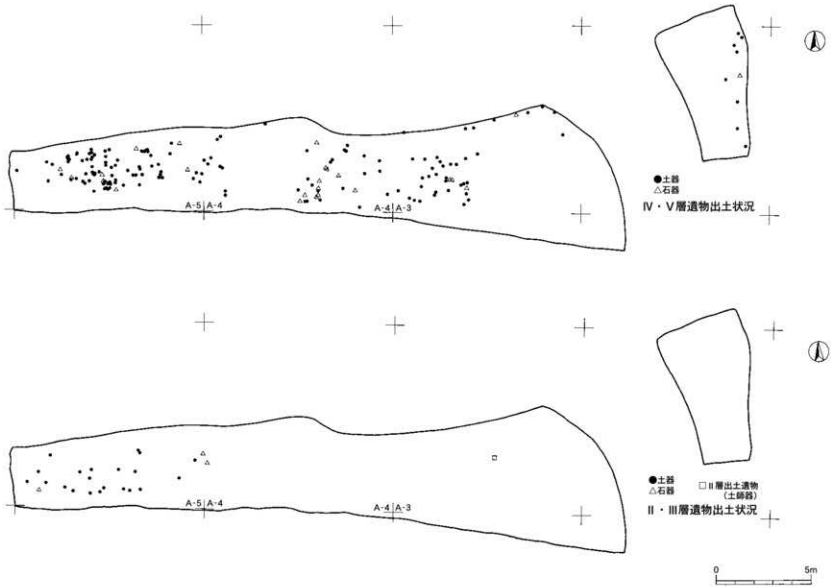
石器（第51図179～182）

179，180は，打製石斧である。179は，自然面を残す横長剥片を素材として両側辺に調整剥離を施して整形している。刃部加工はほとんどなされていない。180も横長剥片を素材としており，破断している。181は，やや扁平な磨製石斧の基部である。成形時の剥離を若干残すものの全面を研磨して仕上げている。破断したものと考えられ，破断面周囲には，その際の剥離も観察される。182は，石皿である。破片であるが，断面が皿状を呈していることから，貝殻文円筒形土器群にしばしば伴うタイプの石皿であると考えられる。

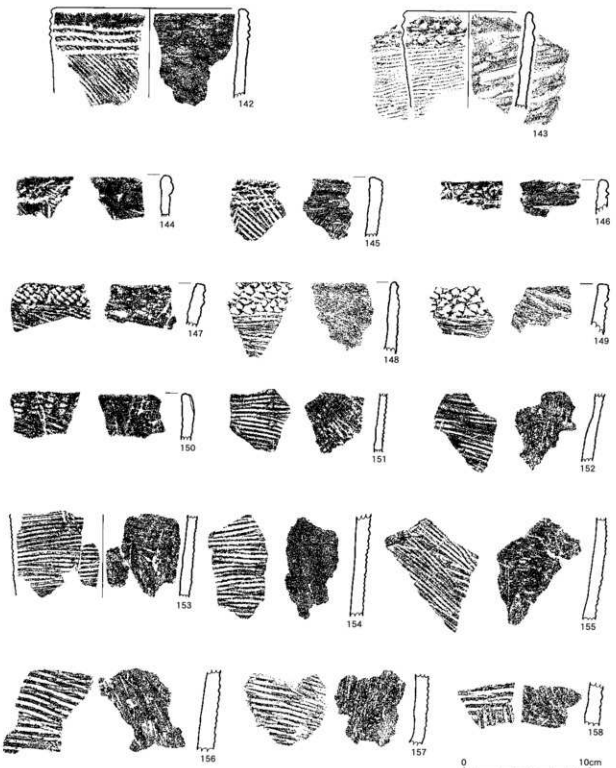
縄文時代以降の遺物（第52図183～190）

183は，古墳時代の蓋のつまみ部分と思われる。

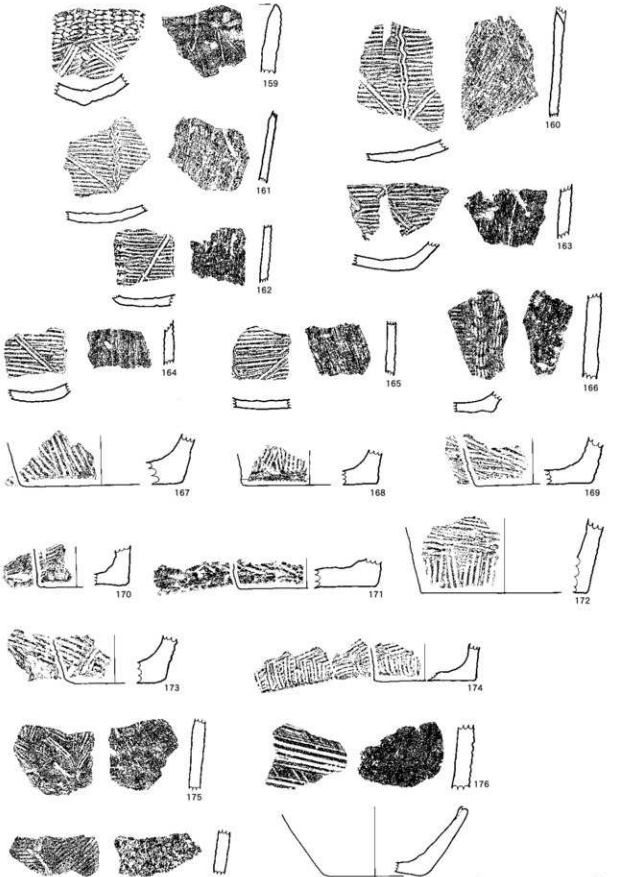
184は，土師質の胎土で皿状の器形を呈した資料で，体部には孔が穿たれている。器種等，詳細の不明な資料である。185～187は，須恵器の小片で器種等は不明である。188は，製塩土器の口縁部片と思われる。189，190は，青磁である。



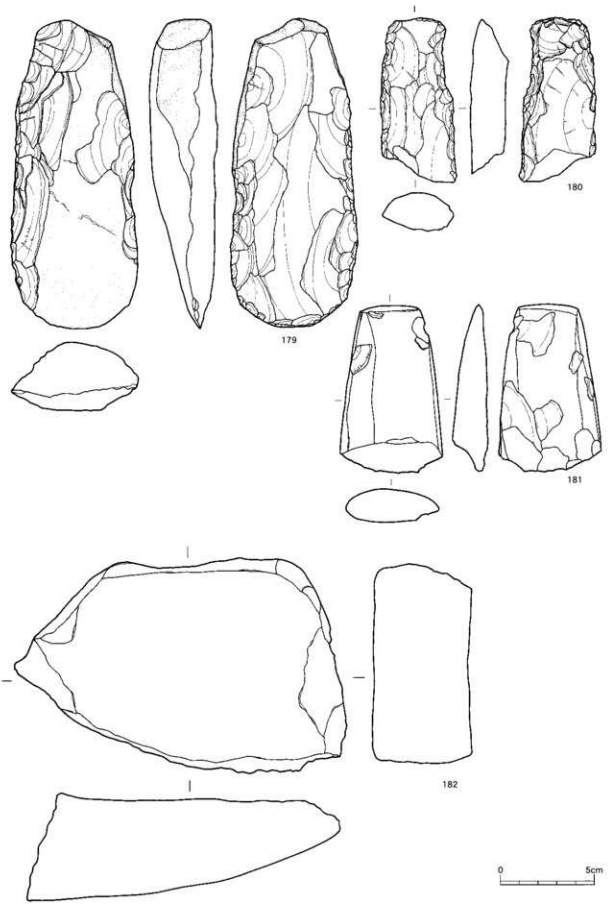
第48図　遺物出土状況図（平成16年度）



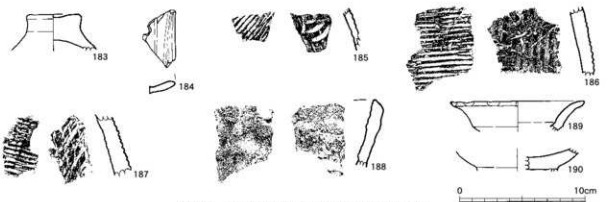
第49図　縄文時代遺物実測図（平成16年度）



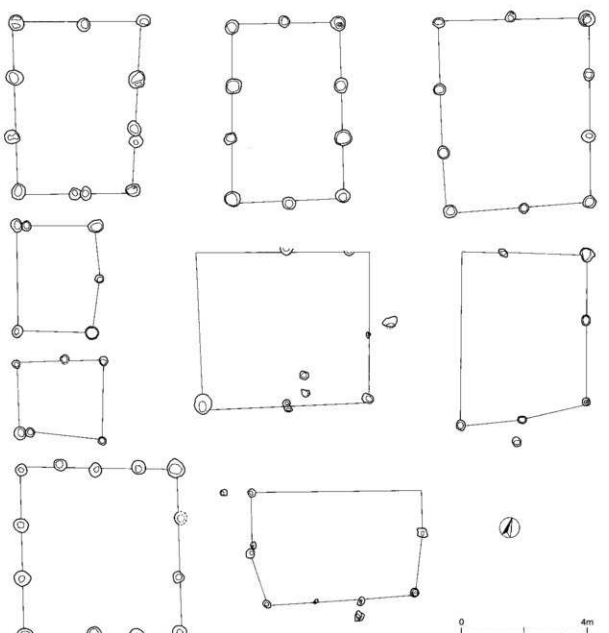
第50図　縄文時代遺物実測図（平成16年度）



第51図　縄文時代遺物実測図（平成16年度）



第52図　古墳～中世遺物実測図（平成16年度）



第53図　古代掘立柱建物跡対照図

第Ⅳ章　市薗遺跡

第１節　調査の概要

本調査は，平成８年度に旧金峰町市教育委員会が隣接する民間施設建設に際し実施した発掘調査結果をもとに範囲を決め，幹線道路であること，周辺に民間施設がせまり迂回路を設定できなかったこと，調査範囲をいちどに掘ると民間施設への出入りができなくなること等を考慮して，民間施設への出入りを確保したうえで１車線ずつ調査することとした。グリッドについては，面積が狭いことや遺物の出土が少なかったことから，特に設けずに調査を実施した。

調査は，表土を重機で除去したのち，Ⅱ層以下を人力で掘り下げて遺物の発見に努め，Ⅲ層上面まで掘り下げたのち，精査して遺構の発見に努めた。その結果，遺物は土師器等をごく少量発見したほか，遺構については，複数の柱穴のほか，交差する溝状遺構を発見した。

なお，北側調査区については，調査区中央部分がＮＴＴケーブル埋設に伴う撹乱を受けていた。また，Ⅲ層以下の調査については，旧金峰町教育委員会の成果を踏まえ，作業の安全性も考慮し，実施しなかった。

第２節　層序

土層の堆積状況は，旧金峰町教育委員会の成果によると，第Ⅲ章で紹介した小中原遺跡の堆積状況とほぼ同じである。

第３節　調査の成果

遺構（第55図）

Ⅲ層上面で，柱穴と判断できたものが60か所確認できたほか，溝状遺構を３条確認できた。

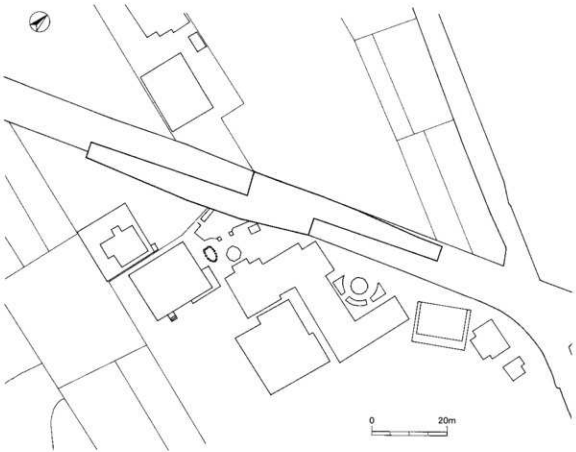
しかし，柱穴は，建物に復元できるものを発見できず，溝状遺構についてもその性格や時期を解明することはできなかった。

遺物

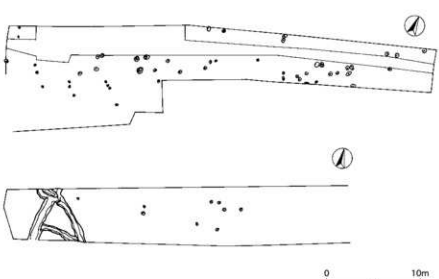
Ⅱ層中から陶器や成川式土器片，Ⅲ層から縄文時代後～晩期と思われる土器片などが出土したが，いずれもごく少量で小さく，図化できるものはなかった。

小結

今回の調査結果からは，遺跡の性格を解明できるような資料を得ることはできなかったが，遺構や遺物の存在を確認できたことから，遺跡の所在するこの台地のどこかに，本遺跡の中核部が存在することが想定される。なお，旧金峰町教育委員会の調査では，遺跡の主たる時期を中世と想定し，阿多城との関連を指摘している。



第54図　調査範囲図



第55図　遺構検出状況図

第２表　小中原遺跡出土遺物観察表

土器ほか

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	遺構	器種	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 カクセン石	胎土 ウンモ	胎土 小礫	胎土 その他	備考
15	9	C15	II	溝付近	深鉢	ナデ	ナデ	淡橙褐色	淡茶褐色	○	○	○				
	10	C15	II	溝付近	深鉢	ナデ	ナデ	淡赤褐色	茶褐色		○					滑石なし
	11	K24	III		深鉢	ナデ	ナデ	明茶褐色			○	○		○		
	12	K27	IIIa		浅鉢	ミガキ	ミガキ	淡黒褐色	淡黒褐色		○	○			赤色粒	
	13	C16	II		深鉢	ナデ	ナデ	淡赤褐色	淡暗茶褐色			◎				
	14	K27	II			ナデ	ケズリ	淡褐色				○				爪形刺突文
	15	K27	IIIa		浅鉢	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色		○	○	○			
18	24	K28	II		甕	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐色	淡黄褐色			△		△		
	25	J26	II		壺	ナデ	ナデ	淡橙褐色	明褐色	○	○					微隆起凸帯
	26	K27	II		甕	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色								
	27	K28	II		大甕	ハケ目	ハケ目	明褐色	明褐色							
	28	K26	II		甕	ハケ目	ハケ目	淡黒褐色	褐色					○	赤色粒	
	29	K29	II		甕	ナデ	ナデ	橙褐色					△	○	赤色粒	
	30	A6	II		甕	ナデ	ナデ	暗茶褐色	淡橙褐色						砂粒	
	31	K26	II		甕	ナデ	ナデ	濃茶褐色	茶褐色	○				○	赤色粒	
	32		埋土	土坑８－９	甕	ナデ	ケズリ	淡紅褐色	淡暗褐色					◎		
	33	K27	II		鉢	ハケ目	ハケ目	淡赤褐色							軽石	
	34	A4	表土		鉢	手づくね		褐色	赤褐色			○		○		
	35	A9	II		壺	ナデ	ナデ	暗褐色	淡橙褐色		○	○				
	36	A6	埋土	P28	鉢	指頭押圧	ナデ	淡赤褐色		○	○				軽石	
31	37	B3	II	埋設	甕	ナデ	ケズリ	茶褐色	茶褐色		○	○		○		
35	38	B6	埋土	P11	坏	ろくろ	ろくろ	肌色						○		
	39	K25	II		坏	ろくろ	ろくろ	明赤褐色								ヘラ切
	40		埋土	土坑８－７	坏	ろくろ	ろくろ	肌色								
	41	K27	II		坏	ろくろ	ろくろ	白肌色	淡黄白褐色							
	42	A6	II		坏	ろくろ	ろくろ	淡黄褐色								
	43	JK26	II		皿	ろくろ	ろくろ	肌色								
	44	A13	II		皿	ろくろ	ろくろ	肌色								
	45		埋土	土坑８－１	坏	ろくろ	ろくろ	淡黄褐色						△		
	46	J21	II		坏	ろくろ	ろくろ	褐色							赤色粒	ヘラ切
	47	K28	II		坏	ろくろ	ろくろ	褐色	淡肌色							
	48	K27	II		坏	ろくろ	ろくろ	褐色								
	49	K28	II		皿	ろくろ	ろくろ	褐色	褐色						砂粒	
	50	J26	埋土	溝２	坏	ろくろ	ろくろ	灰色	灰色							
	51	B地区	表		皿	ろくろ	ろくろ	淡灰白色								
	52			焼土１	皿	ろくろ	ろくろ	明橙褐色							砂粒多	
	53	J27	II		坏	ろくろ	ろくろ	肌色	淡灰褐色							
	54	J26	埋土	溝２	皿	ろくろ	ろくろ	肌色	肌色							
	55	JK26	II		坏	ろくろ	ろくろ	淡黄褐色	淡黄褐色							
	56	J26	埋土	溝２	坏	ろくろ	ろくろ	褐色	褐色						赤色粒	
	57	K21	II	溝３	坏	ろくろ	ろくろ	肌色								
36	58		埋土	土坑８－８	椀	ろくろ	ろくろ	肌色								
	59	K26	II		坏	ろくろ	ろくろ	肌色							砂粒	内赤
	60	N26	II		椀	ろくろ	ろくろ	明黄褐色	明黄褐色							
	61	K28	II		椀	ろくろ	ろくろ	褐色	褐色							
	62	J26	埋土	溝２	坏	ろくろ	ろくろ	褐色	褐色						赤色粒	
	63	K26	II		椀	ろくろ	ろくろ	肌色								
	64	K23	埋土	土坑７	坏	ろくろ	ろくろ	肌色								
	65	A2	II		椀	ろくろ	ろくろ	淡肌色								
	66	一括			椀	ろくろ	ろくろ	肌色	肌色							内赤
	67	K27	II		椀	ろくろ	ろくろ	肌色	肌色							内赤
	68	K26	埋土	溝２－11	椀	ろくろ	ろくろ		黒色							内黒
	69	K26	II		土師坏	ろくろ	ろくろ	淡褐色	黒色			○				内黒
	70	J26	埋土	溝２	成川甕	回転台		淡橙褐色	淡橙褐色	◎						
	71	K26	II		椀	ろくろ	ろくろ	明黄褐色	明黄褐色							
	72	A6	II		坏	ろくろ	ろくろ	肌色							赤色粒	
	73				椀	ろくろ	ろくろ	赤褐色								
	74	A6	II		土錘	てづくね		褐色			○					
	75	K28	II		土錘	てづくね		淡褐色								
	76	A6	II		土錘	てづくね		褐色		○	○				赤色粒	
	77				土錘	てづくね		淡橙褐色		○	○	○			赤色粒	
	78	K27	II		深鉢	ナデ	ナデ	暗茶褐色	肌色					○		
37	79	A2	II		甕	ヨコナデ	ケズリ	淡赤褐色						○		
	80	J29	II		甕	ナデ	ハケメ	褐色	淡赤褐色		○	○				
	81	B6	II		甕	ハケメ	ケズリ	褐色			○				赤色粒	
	82	B6	II		甕	ハケ目	ケズリ	褐色				○		○		
	83	B6	II		甕	ハケ目	ケズリ	肌色						○		
	84	A、B6	II		甕	ナデ	ケズリ	明茶褐色		○		○				
	85	B3	埋土	方形竪穴	甕	ハケ目	ケズリ	淡橙褐色		○	○		○			
	86	K27	II		甕	ヨコナデ	ケズリ	茶褐色	褐色						赤色粒	
	87		埋土	P12	甕	ヨコナデ	ケズリ	褐色	明褐色					○		
	88	BC	II		甕	ナデ	ケズリ	淡赤肌色	肌色			○		○		
	89	B6	II		甕	ナデ	ケズリ	淡赤褐色						○		
	90	A6	埋土	P27	甕	ケズリ	ケズリ	淡橙褐色	褐色					○		
38	91	B5	埋土	P67	坏	ろくろ	ろくろ	灰色	灰色							
	92	B5	埋土	P10	坏	ろくろ	ろくろ	灰色	灰色							
	93		埋土	焼土２	皿	ろくろ	ろくろ	黄灰色								
	94	B6	II	焼土付近	椀	ろくろ	ろくろ	灰色	灰色							
	95	K28	II		椀	ろくろ	ろくろ	灰色	灰色							
	96	A6	II		椀	ろくろ	ろくろ	灰色								
	97	K26	II		椀	ろくろ	ろくろ	あずき色								
	98	K25	II		坏	ろくろ	ろくろ	灰色								
	99	B4	II		坏	ろくろ	ろくろ	淡灰白色	濃灰色							
	100	B3	埋土	方形竪穴	坏	ろくろ	ろくろ									
	101	K27	II		椀	ろくろ	ろくろ	淡紅色								火襷
	102	J29	II	P25	壺			淡黄灰色								
	103		埋土	P3	壺	ろくろ	ろくろ	灰色	灰色							
	104	K28	II		壺			肌色							土師質	
	105	K27	II		壺	ろくろ	ろくろ	黄灰色								
	106	K28	II		壺	ろくろ	ろくろ	淡黄灰色	淡黄灰色							
	107	K28	II		壺	ろくろ	ろくろ	淡黄灰色	淡暗黄灰色							
	108	K28	II		壺	ろくろ	ろくろ	灰色								
	109		表		壺	ろくろ	ろくろ	淡黄灰色								
	110	A6	II		壺	ろくろ	ろくろ	灰色	淡橙色							肩部に凸帯
	111	K28	II		壺	ろくろ	ろくろ	淡灰色	褐色							
	112	K26、27	II		坏	ろくろ	ろくろ	濃灰色	淡灰色							
39	113	K28	II		壺	平行タタキ	同心円タタキ	淡紅色	淡黄褐色							

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	遺構	器種	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 カクセン石	胎土 ウンモ	胎土 小礫	胎土 その他	備考
39	114	B6	II		壺	ろくろ	ろくろ	淡灰色	濃灰色							
	115	J29	II	P25	壺	ろくろ	ろくろ	淡紅色	淡黄褐色						黒色粒	
	116	B5	II		壺	ろくろ	ろくろ	灰色	淡黄灰色							
	117	A6	II		壺	平行タタキ	同心円タタキ	灰色								
	118	K26	埋土		壺	平行タタキ	球状当て具	淡黄白色	暗灰茶褐色							
	119	K26	埋土	溝2－8	壺	タタキ		濃茶褐色	淡暗褐色							耳部
	120	K28	II		壺			オリーブ色	オリーブ色							耳部
	121	JK26	II		壺	平行タタキ	同心円	濃小豆色	茶褐色							
	122	JK26	II		壺	平行タタキ	平行・車輪	明灰色	淡黄色							
	123	K28	II		甕	平行タタキ	車輪	明灰色	淡橙色							
	124	K28	II		甕	平行タタキ	平行タタキ	明灰色	淡橙色							
	125	K28	II		甕	平行タタキ	平行、同心円	淡黄灰色	淡黄灰色							
40	126	K25	II		壺	格子目タタキ	タタキ	灰色	灰色							
	127	K26	II		壺	タタキ、ナデ	タタキ、ナデ	灰色								
	128	A6	II		壺	ハケメ	タタキ	黄褐色	淡黄灰色							
	129	K27,28	II		大甕	平行タタキ	同心円タタキ	明灰色								
	130	JK26	II		壺	平行タタキ	平行タタキ	あずき色	明茶褐色							
	131	一括			壺	タタキ→ナデ	タタキ→ナデ	淡赤灰色	肌色							
41	132	A6	II		壺	平行、格子目	同心円、平行	濃灰色	灰色							
44	133	BC古道	II		皿	ろくろ	ろくろ	肌色								
	134	B	表土		鍋	ろくろ	ろくろ	灰色	灰色							
	135		表土		擂鉢	ろくろ	ろくろ	淡褐色				○	○	△	赤色粒	
	136		埋土	溝7	碗	ろくろ	ろくろ	白色								
	137	B6	II		碗	ろくろ	ろくろ	黒灰色	あずき色							
	138		埋土	土坑8	壺	ろくろ	ろくろ	暗赤色	暗赤色							
	139		埋土	土坑8	碗	ろくろ	ろくろ	暗褐色								
	140	K24	III					黄白灰色								
	141	C	II			型抜き		灰色								
49	142				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	淡黄白褐色	淡黄白褐色	○	○	○		○		
	143				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	暗茶褐色	褐色	◎					細粒	
	144				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	暗灰褐色	淡黒褐色		○	○				
	145				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	淡黒褐色	暗灰褐色	○	○	○				
	146				深鉢	(貝殻条痕)	粗ナデ	濃茶褐色	茶褐色		○	○				
	147				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	淡黄茶褐色	茶褐色	○	○	○		○		
	148				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	淡黒褐色		○	○			○		
	149				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	淡黒褐色		○	○			○		
	150				深鉢	(貝殻条痕)	粗ナデ	淡褐色	濃茶褐色	○	○	○				
	151				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	淡橙褐色	褐色		○	○	○			
	152				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	灰褐色	黄白褐色	○	○	○		○		
	153				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	濃茶褐色	茶褐色	○		○		○		
	154				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	茶褐色	暗赤褐色		○	○	○			
	155				深鉢	(貝殻条痕)	粗ナデ	淡暗褐色	褐色	○	○		○			
	156				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	暗褐色	暗褐色		○	○	○	○		
	157				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	淡赤茶褐色	淡赤茶褐色	○	○					
	158				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	褐色	暗褐色		○		○			
50	159				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	暗茶褐色	淡黒茶褐色		○		○	◎		
	160				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	淡橙褐色	淡赤褐色	◎				◎		
	161				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	茶褐色	暗赤褐色		◎					
	162				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	淡橙褐色	淡橙褐色	○	○			○		
	163				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	淡灰茶褐色	茶褐色		○	○		○		
	164				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色	○	○	○			2色	
	165				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	濃赤茶褐色	濃赤茶褐色	○	○	○			2色	
	166				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	淡茶褐色		○	○	○				
	167				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	明赤褐色		○	◎			△	軽石	
	168				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	茶褐色	赤褐色		○	◎		○		
	169				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	褐色			○			○	軽石	
	170				深鉢	(貝殻条痕)		淡赤褐色	褐色	◎		◎		△		
	171				深鉢	(貝殻条痕)	粗いナデ	褐色	暗茶褐色	○		○		○		
	172				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	暗褐色	濃茶褐色		◎	○		○		
	173				深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	明赤褐色	褐色	○	○	◎		◎		
	174	A5	一括		深鉢	(貝殻条痕)	ケズリ	褐色	淡茶褐色	◎	△		○	○		
	175				深鉢	(貝殻条痕)	ナデ	淡赤茶褐色	茶褐色		○	○				
	176		表採		深鉢	ナデ	ナデ	淡赤褐色	淡赤茶褐色	○	○		○	○		
	177				深鉢	(貝殻条痕)	ナデ	褐色	褐色	○	○	○	○			
	178				深鉢	ナデ	ナデ	淡赤茶褐色	淡茶褐色		◎	◎			細粒	
52	183				ふた	ナデ	ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	○	○	○				
	184	A5	I一括			ナデ	ナデ	肌色	肌色							
	185				甕	平行	同心円	灰白色	灰白色							
	186		表採		甕	平行	平行	灰茶褐色	灰褐色							
	187	A5	I		甕	平行	平行	灰褐色	灰褐色							
	188	表採			焼塩壺			褐色	淡赤褐色					△		
	189	A5	I		皿	ろくろ	ろくろ	淡緑色	淡緑色							
	190	A6	I		碗	ろくろ	ろくろ	淡緑色	淡青緑色							

石　器

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	器種	石材	最長 (cm)	最幅 (cm)	最厚 (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
9	1	K23	VII	剥片石器	頁岩	3.80	3.95	0.50	7.93		
	2	J24	VII	剥片石器	頁岩	6.00	3.50	0.60	15.44		
	3	J25	VII	剥片石器	頁岩	6.40	3.70	0.70	20.04		
	4	C12	VII	石核	黒曜石	3.10	3.25	3.30	38.55		
	5	J15	VII	礫器	頁岩	11.10	7.70	2.50	300.00		
	6	J24	VII	礫器	頁岩	8.00	7.90	1.75	141.22		
	7	J24	VII	礫器	頁岩	5.30	7.70	1.70	82.55		
	8	J25	VII	礫器	頁岩	8.10	6.25	1.00	73.06		
16	16	8T	V	石鏃	黒曜石	2.30	1.75	0.40	1.37		
	17	10T		石鏃	黒曜石	1.35	1.40	0.40	0.55		
	18	A－2		磨石	安山岩	9.00	8.70	4.50	550.00	146	
	19	K29	II	磨石	砂岩	9.10	6.00	4.30	350.00		
	20	K21	表	砥石	頁岩	6.70	2.10	0.95	22.88		
	21	K21		砥石	頁岩	6.40	2.80	1.60	39.68		
	22	A13		叩石	ホルンフェルス	10.35	6.50	2.00	178.29		
	23	6T	黒色土	礫器	頁岩	9.50	6.00	1.22	80.90		
51	179			磨製石斧	安山岩	16.30	6.75	3.60	500.00	56	
	180			打製石斧	頁岩	8.10	4.10	2.05	91.17	84	
	181			磨製石斧	頁岩	8.80	5.50	1.95	128.17	153	
	182			石皿	安山岩	11.30	17.10	5.60	1200.00		

第Ⅵ章　まとめ

旧石器時代について

平成11，12年度調査区では，薩摩火山灰層の下位から黒曜石や頁岩のフレイク，チップ類が発見された。平成11年度調査区の東側の削平部分をはさんで双方の出土地点があることから，確たることは言えないが，双方の出土地点は別々の活動痕跡ではなく，同じ作業スペースであった可能性もある。

第Ⅳ章で報告した資料のうち，頁岩製の剥片石器は加工具であるが，一部を除いて，母岩から剥離した大形の剥片で利用できる部分を一時的に利用したと考えられる程度のもので，定型的な石器とは言い難い。今回調査した程度の面積でこうした石器のみが複数発見され，定型的な石器がまったく発見されなかったことには，多少奇異な印象も受ける。それでも，当時の剥片利用の一端をうかがい知れる資料として意味があろうと思われる。

本遺跡周辺にはナイフ形石器文化期の遺跡も数か所存在していることから，今回発見された遺物群は，これらの遺跡に連なる時期のものと想定することはできるであろう。

縄文時代について

平成11，12年度調査区からは遺物があまり発見されなかったが，平成12年度調査区で早期相当層および晩期相当層から土坑が出土している。調査担当は落とし穴を想定しているが，もし落とし穴であるならば，遺物の少なさは逆に当時の土地利用の様相を示す結果として意味があるといえる。各土坑の底面の情報がもう少し拾える状況であればなおよかったのであろう。

一方，平成16年度調査区からは，小面積ながら早期の集石と遺物がまとまって発見された。集石は密集するものの明確な掘り込みを持たないタイプのもの，遺物は前平式系の土器群で，あまり型式幅がない。これらの状況は従前の出土例と矛盾しない様相である。

調査面積が狭かったにもかかわらず，これだけの出土量があったということは，小中原の台地上に当該期の遺跡がまだあることが想定される。万之瀬川河口域では，これまでにも低位段丘上に展開する早期の遺跡の存在が知られていたが，近年，他地域でもそうした立地の遺跡例の報告が見られるようになっている。今回の調査例もそれに加わることとなり，南九州における貝殻文円筒形土器期の生活相の復元がさらに進むことが期待できる。

弥生時代から古墳時代について

今回の調査では，あまり有意な情報は得られなかったが，西海岸側の土器と東海岸側の土器が出土するという様相をつかむことができ，従前の出土例を追認することができた。また，中津野式に伴う多条突帯壺の資料も追加することができた。

古代について

小中原遺跡は，薩摩半島南西部，万之瀬川下流域右岸のシラス台地上に広範囲に渡る遺跡と設定されている。小中原遺跡の立地する台地上にはいくつかの遺跡が知られており，白糸原遺跡や市歯

遺跡など発掘調査の実施されたものもあるが，古代の遺跡は小中原遺跡が代表である。この台地周辺の古代の遺跡をみてみる。南の万之瀬川下流域の自然堤防上には持躰松・渡畑・芝原・上水流の４遺跡が知られている。持躰松遺跡では掘立柱建物跡や刻書土器等が出土している。また，芝原遺跡では掘立柱建物跡のほか仏具である多口瓶や石帯，墨書土器等が出土している。これらは，川辺の官衙的・宗教的遺跡として注目される。（現時点で芝原遺跡の報告書は作成中で未刊行。）さらに，対岸では上加世田遺跡で越州窯系青磁が出土しているなど古代の主要遺跡として知られている。また，小中原東南部の中岳山麓には，薩摩最大の須恵器古窯跡群がある。

広範囲の小中原遺跡の調査を振り返る。平成元～２年の主要地方道鹿児島加世田線（県道20号）改良工事に伴う調査（第１次調査）では，台地のほぼ中央部分が調査された。この調査では，「平安時代の調査」として，掘立柱建物跡12棟，土坑42基，溝状遺構13条が検出され，土師器・須恵器・焼塩壺・紡錘車・灯火器・黒色土器・墨書土器・刻書土器・鉄器（刀子）・青銅器（帯金具）・石器（砥石・磨石）・鉄さい等が出土したと報告している。特に「阿多」と刻書された土師器が発見されたことで，この地が「阿多郡衙」の推定地のひとつとなった。

その後，金峰町教育委員会によって第２・３次の調査が実施された。これらの調査範囲は第１次調査範囲の北側に隣接する。第２次調査は，30㎡の狭い範囲の調査であったが，溝状遺構１条を検出し，第１次調査で検出された溝とつながり，掘立柱建物と関連が指摘された。一方，第３次調査は調査面積が566㎡であった。「平安時代の調査」では，掘立柱建物１棟，溝状遺構１条，土坑３基，柵列遺構２基等と土師器・須恵器・鉄鎌・刀子・土錘が出土した。土坑には土師器焼成窯と想定されるものもみられた。

今回の調査範囲は，これまで３次に渡る調査範囲（北地区とする）の隣接地と，そこから500m南方に位置する範囲（平成11年度調査と平成12年度調査‐国道270号。南地区とする。）である。なお，隣接地調査では，特段新たな成果は得られなかった。

今回の南地区はさらに，平成11年度調査の西側と平成12年度調査の東側の２地点にわかれる。この２地点の間は，ちょうど台地の尾根にあたる部分であるが，削平され，包含層及び遺構面が検出できなかった。

平成11年度調査区では７棟の掘立柱建物跡があり，密集して検出された。規格別では２間３間が３棟，２間２間が可能性のあるものを含めて２棟，１間２間を基本としつつ，長辺中央の１本のないものが２棟である。１，６号が離れている以外は，切り合い関係にある。切り合ってはいるものの，長軸方向が南北方向であまりぶれていない上に，新旧関係の把握は困難であった。そして３，４，５，７号は建物内に焼土を伴うものである。

古代の掘立柱建物跡に焼土を伴うものは，霧島市中尾立遺跡の例が知られている。カマドの出土例が少ない鹿児島県では，この中尾立遺跡の例を引いて，掘立柱建物内に地床炉を備えるスタイルを一般的なものとして考えている。しかしながら，小中原遺跡で焼土の有無がはっきりと区分されていることが判明した。この差をどのような機能差とみるかが課題となろう。

なお，柱痕跡が明瞭にみられたことも今回の調査の大きな成果であった。

平成11年度調査区で，西端で発見されたのが竪穴住居跡である。古墳時代の竪穴住居を切り，須恵器坏などを伴っていたが，方形の竪穴内部に柱穴は認められなかった。これに付随するように，

土師甕の埋納土坑が検出された。本報告では，柱穴が不明であることから，発掘調査時の「食器を伴う方形竪穴遺構」という観点を踏襲している。

土師甕は煮炊具であり，通常は使用され破損し破片の状態で出土するが，まれに蔵骨器等に使用され完形で出土する。今回の出土も意図的（祭祀か？）埋納である。調査段階では，建物の傍に埋納することから胞衣壺説も指摘されたが，本県では稀な例であり，可能性に留めている。

古代の竪穴住居跡は，鹿児島県においては指宿市橋牟礼川遺跡や薩摩川内市大島遺跡などの例が知られているが，多くはない。古代の集落を検討する場合，それを構成する掘立柱建物跡と竪穴住居跡（建物跡？）との関連性（その有無や比率など）を検討することが求められよう。小中原遺跡で検出された竪穴は土師甕の意図的埋納を伴うことも考慮すると，小中原集落における祭祀的な場であるかもしれない。掘立柱建物跡内に焼土があることもその要素として把握できるかもしれない。やや性急ではあるが，機能差を考慮したい。

平成12年度調査区は，南地区の東側で，掘立柱建物跡２棟，溝状遺構，土坑が検出された。掘立柱建物跡は３間４間のものと地区外に伸びる３間のものとがあった。前者は柱間の距離がやや狭いものであった。これは溝２と軸が揃うものであるが，切りあい関係にある。土坑８は削平されているものの，土師器を伴っており，一括性の検討資料として活用できる。

南地区での出土品には，土師器（坏・椀・高台付皿・甕），須恵器（高台付坏・坏・蓋・壺・甕），土錘等があり，その種類に北地区との差異がみられる。

土師器坏は底部がヘラ切りで，断面形状が逆台形状を呈するものである。口径に対し底径が小さめで，体部は直線的なものとやや丸みをもつものとがある。椀は直線的な体部をもつものと丸みをもつ体部，また，高台がハの字状になるもので，短いものと高さのあるものとがある。高台付皿は直線的に外方に伸びる体部で，ハの字状を呈する高台をもつものである。甕は埋納されたものを除いては，残りが悪いが，あまり長胴にならないと想定される。これら土師器の年代は，9世紀前半から後半にかけてのものが中心であるが，一部10世紀中頃のものもあると思われる。

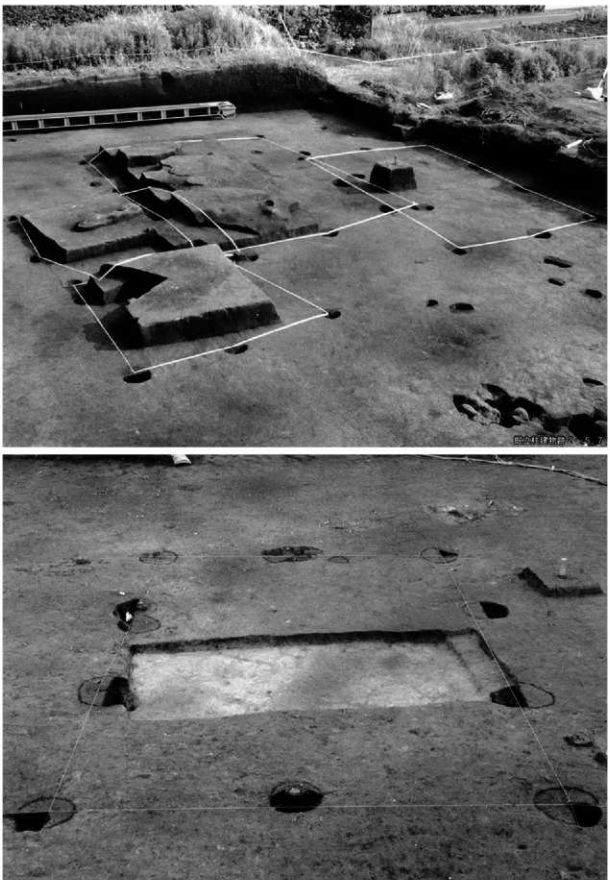
一方，須恵器の高台付坏は高台が底部の外周よりやや内側につくものである。坏は口径と底径の差が少ないいわゆる箱型のものが主である。蓋はわずかに高さのあるものである。これらは８世紀後半から９世紀前半にかけてのものである。壺は長頸もしくは短頸の二重口縁になるものと思われる。甕は短頸で広口，あるいは二重口縁のものがある。

須恵器と土師器の年代が異なるが，少なくとも南九州においては，土師器は須恵器の模倣形態として成立し，９世紀中頃以降食器組成の主体となるものであり，したがって，小中原遺跡南地区は８世紀後半から９世紀後半まで連綿と続く遺跡としてとらえることができる。ただし，検出された遺構がこのうちどの段階に位置づけられるかは幾分困難であった。しかし，古代集落の様相を知る上で検討すべき課題を提起する有意義な調査であると評価したい。

中世から近世について

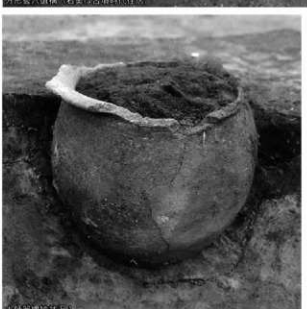
溝状遺構がわずかに発見されているが，遺存状況があまり良好でないため，有意なことを述べる状況にない。むしろ，この時期の遺構や遺物がほとんど発見されなくなるということが，逆に，古代におけるこの土地の利用に関する政治的背景を浮き彫りにしているように思われる。

写　真　図　版

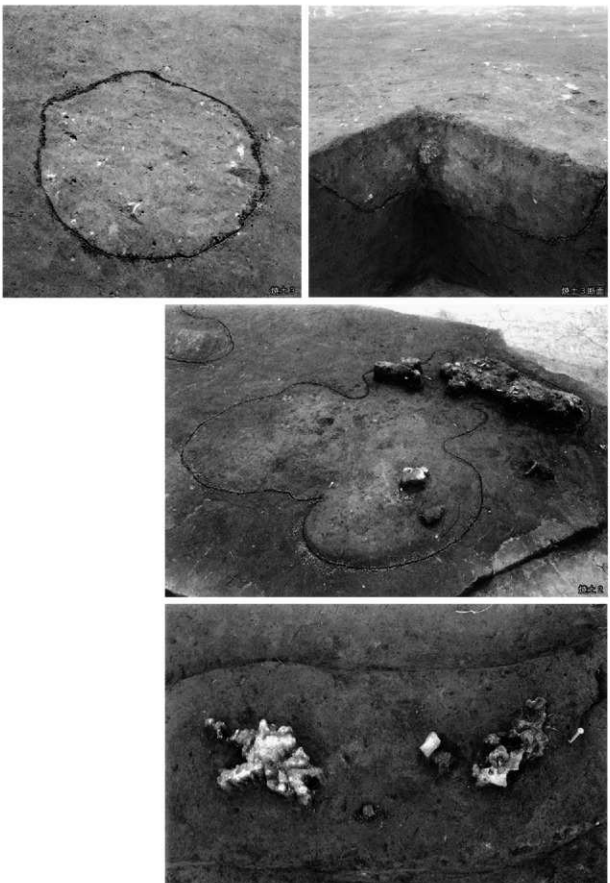


小中原遺跡掘立柱建物跡（平成11年度）

図版２

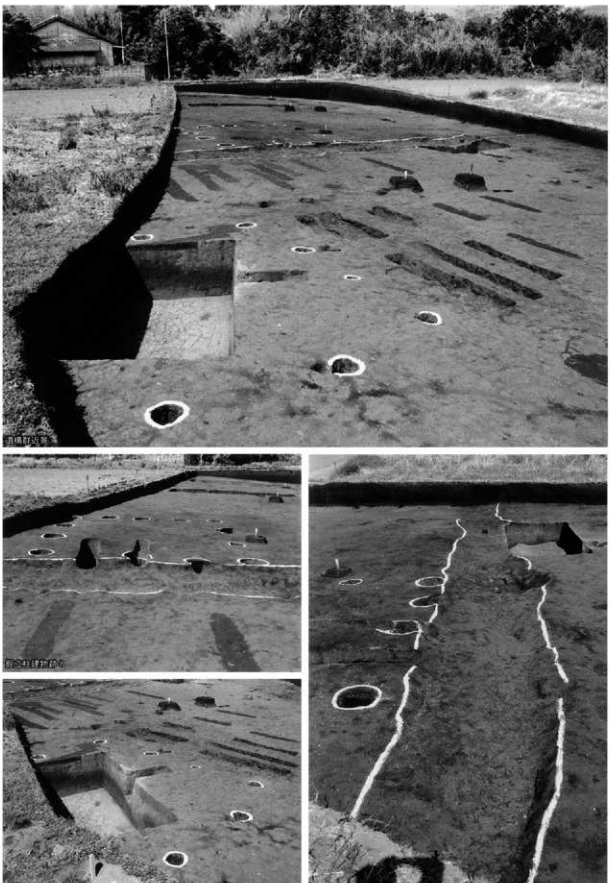


小中原遺跡方形竪穴遺構（平成11年度）



小中原遺跡焼土（平成11年度）

図版４

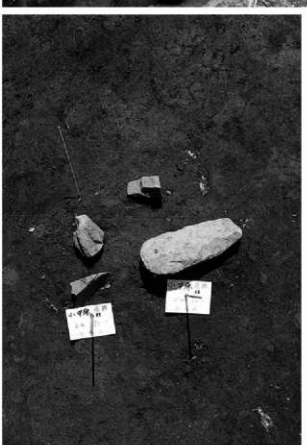


小中原遺跡掘立柱建物跡・溝状遺構（平成12年度）

小中原遺跡土坑８（平成12年度）

図版 6

小中原遺跡土坑ほか（平成12年度）



小中原遺跡集石ほか（平成16年度）

図版 8

市薗遺跡調査状況

38

58

39

68

45

63

40

51

44

46

78

小中原遺跡出土遺物

図版10

94

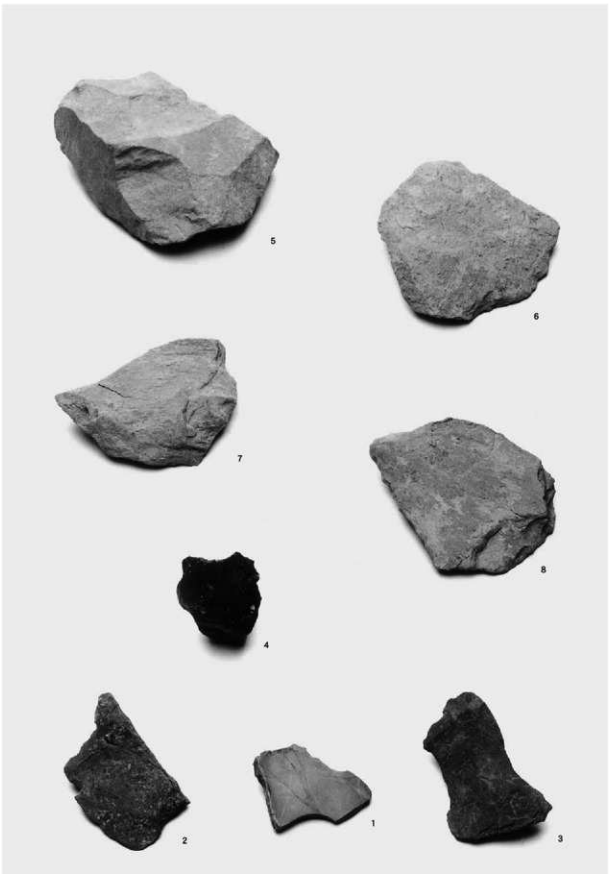
91

92

105

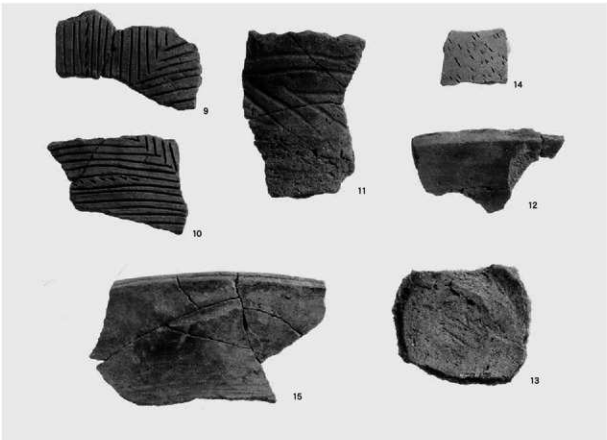
37

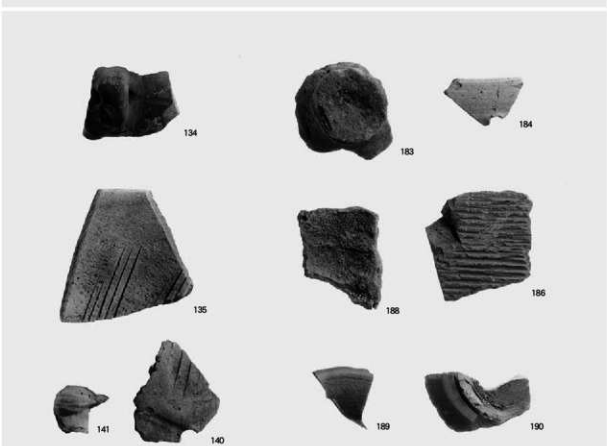
小中原遺跡出土遺物



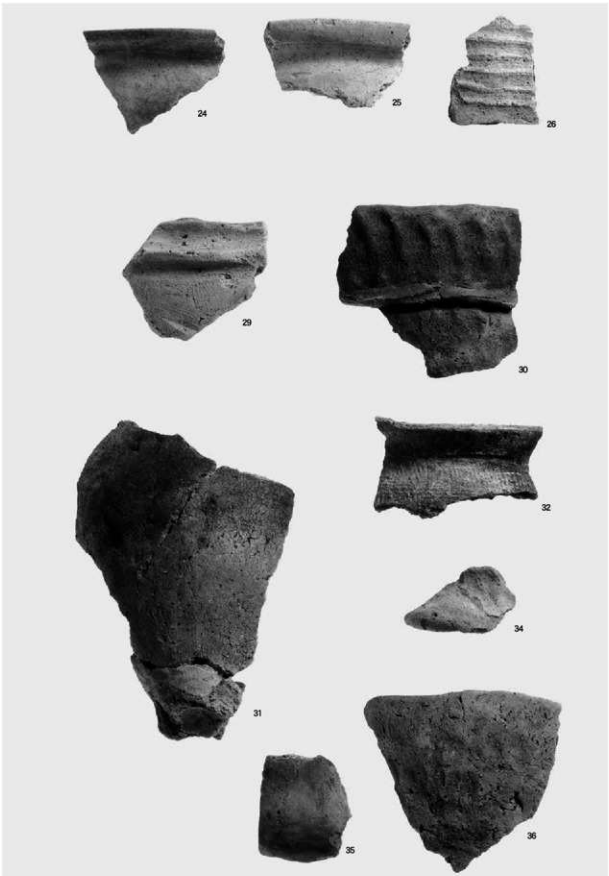
小中原遺跡出土遺物

図版12



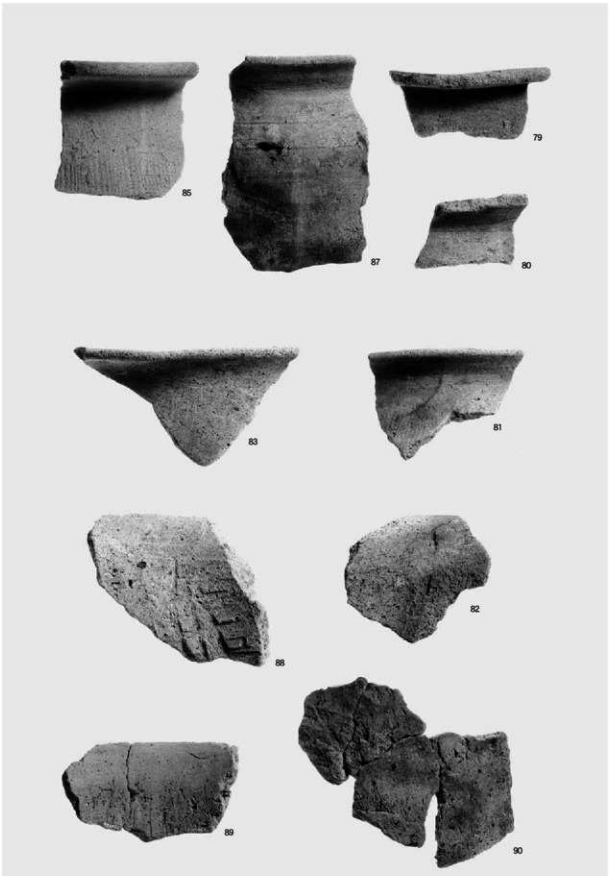


小中原遺跡出土遺物

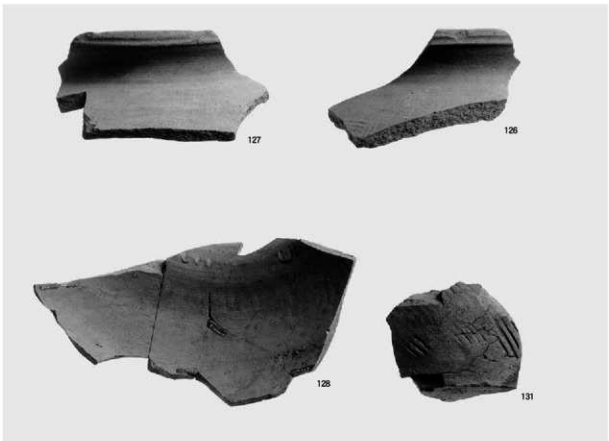


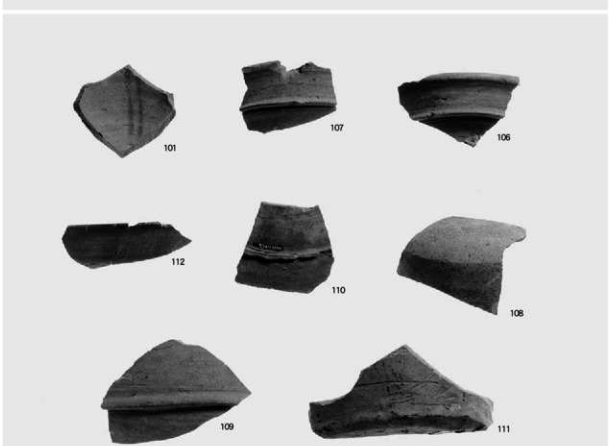
小中原遺跡出土遺物

図版14



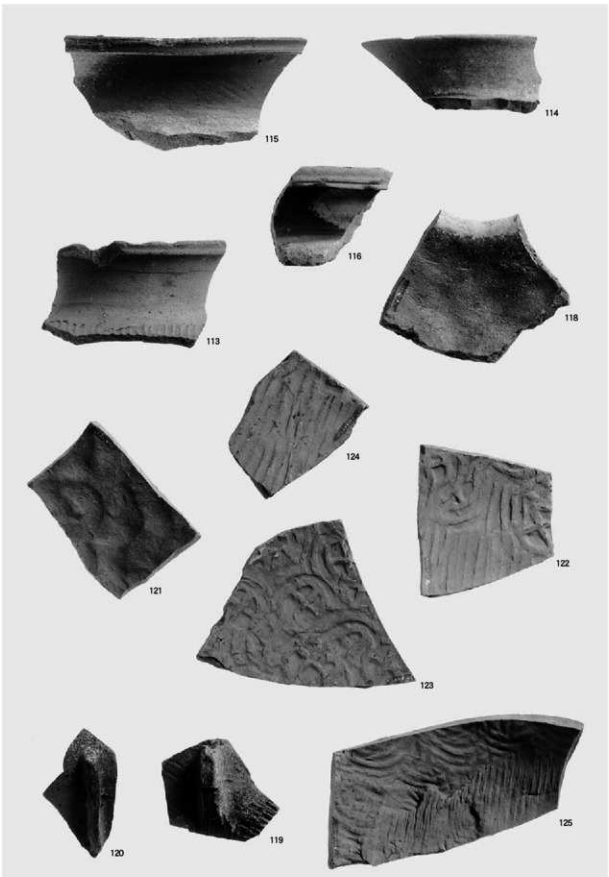
小中原遺跡出土遺物



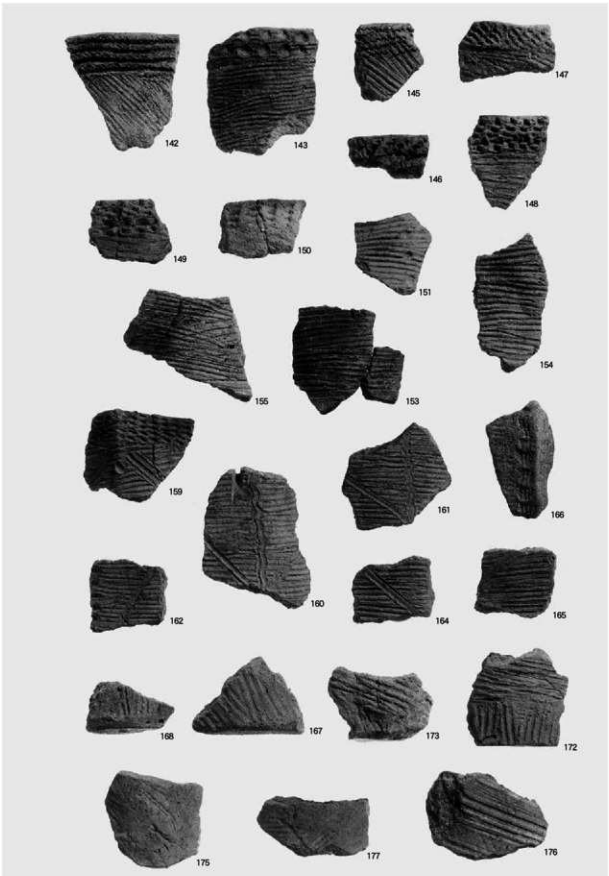


小中原遺跡出土遺物

図版16

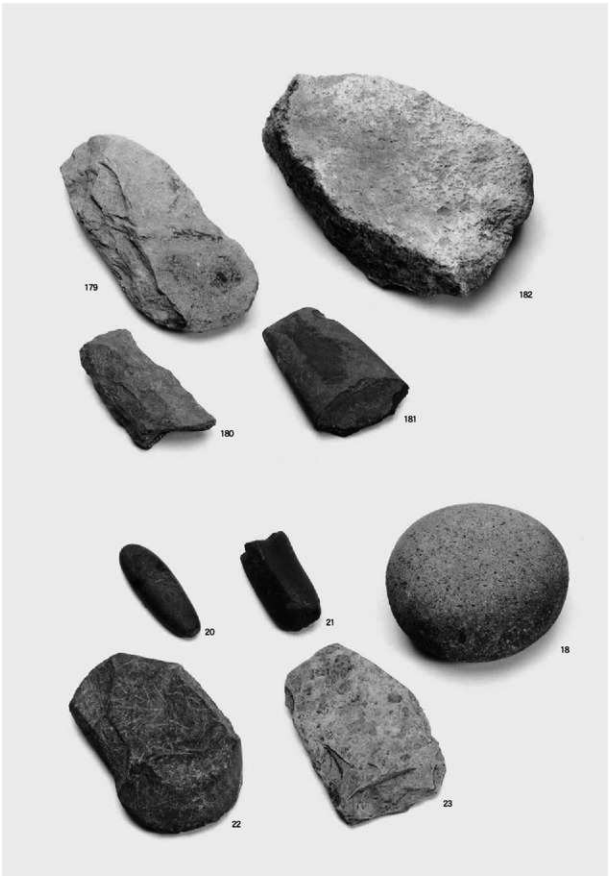


小中原遺跡出土遺物


142
143
145
147
146
148
149
150
151
154
155
153
159
161
166
160
162
164
165
168
167
173
172
175
177
176

小中原遺跡出土遺物

図版18



小中原遺跡出土遺物

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（142）
国道270号改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

小中原遺跡
市薗遺跡

発行日　平成21年３月

発行者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
ＴＥＬ（0995）48－5811

印刷所　株式会社あすなろ印刷
〒899－0041　鹿児島市城西2－2－36
ＴＥＬ（099）214－3757